

## 講義等の内容

授業科目名	講義等の内容
健康科学特別講義Ⅰ	国民の健康に対する意識は非常に高くなり、生活習慣との関連がクローズアップされている。特に多々ある疾病において食・栄養とリハビリテーションは分野を超えた関連性が指摘され、これらがタイアップして、新たな学問領域を形成しつつある。健康科学特別講義では食と福祉の観点から、専門分野の最新情報を取り入れ、現状と課題について問題提議し、自ら解決できる素養を養う。
健康科学特別講義Ⅱ	健康科学特別講義Ⅰで学んだことをさらに専門性が高いものにするため、講義テーマを絞り、健康・食・栄養・リハビリテーションにおける最近のトピックを紹介し、ディスカッションしながら講義を進める。
健康科学研究法特論Ⅰ	健康科学分野に寄与できる研究テーマの選択、データ収集、統計処理など研究デザインに関する一連の方法、ならびにプレゼンテーションや修士論文執筆の方法などについて教授する。
健康科学研究法特論Ⅱ	食および福祉を重点課題として、栄養学研究とリハビリテーション学研究所の協力を諮り、両分野における研究課題を掘り起こし、必要な実験法および調査・情報収集法を学び、研究者としての素養を養う。
栄養生理学特論Ⅰ	栄養生理学特論Ⅰでは、健康に関わる生体機能の中で多様な生理学的役割を持っているタンパク質の構造と生理機能を理解する。特にエネルギー代謝に関わる酵素やホルモンの情報伝達、免疫や血液凝固などの生体防御の生理機能を理解する。また、それらの遺伝情報と細胞中での発現を理解する。
栄養生理学特論Ⅱ	栄養生理学特論Ⅱでは、特論Ⅰの内容に基づき、栄養に関わる生理活性物質の特性・機能などに関する最近の情報を学習する。具体的には生理機能を裏付ける総説や英文の論文を取り上げ、読み解き、その内容を理解する。これらの総説や論文を通して先端的な知識を修得すると共に、読解力も養成する。
臨床栄養学特論Ⅰ	生体にとって摂取された栄養素がスムーズに代謝されるには、生体の酸・塩基平衡が確実に保たれていることが必須である。酸・塩基平衡は体液の緩衝系・呼吸調節機能、腎臓、などによって調節されているが、ことに小児では、そのバランスが簡単に障害される。ここでは、①体内代謝と酸の産生、②体液の緩衝作用と pH の調節、③体液 pH 調節の原理、④生体の酸・塩基平衡異常、⑤アシドーシス、⑥アルカローシス、⑦食事療法について実例を提示しながら講義を行い、食を中心にその対応を検討する。
臨床栄養学特論Ⅱ	近年、アレルギー疾患が急増している。その理由として①住環境の変化、②食環境の変化、③精神環境の変化、④体質の変化、などがあげられている。なかでも最も有力な仮説として、衛生仮説がある。住環境・食環境が以前と比較して極めて衛生的となり、感染症が少なくなったことが指摘されている。すなわち人の免疫の中で感染に対応する Th1 リンパ球が少なくなり、アレルギーを起こしやすい Th2 リンパ球が相対的に増えてきている。食環境を中心にしてこの問題について考え、検討してみたい。
食品学特論Ⅰ	食品について多面的な観点から学ぶ。栄養的意義、二次機能および三次機能について詳しく解説し、ヒトの健康と食品の持つ潜在的機能について学修する。食品学特論Ⅰでは食品成分の化学的なアプローチを中心に、食品の機能について最新の情報を提供し、高度な専門的知識を習得する。
食品学特論Ⅱ	食品について応用面の観点から学ぶ。貯蔵中や加工中の食品成分について詳しく解説し、食品の持つ潜在的機能とヒトへの応用について学修する。「食品学特論Ⅱ」では、最新の発酵の開発、食品バイオテクノロジーの基礎と技術、食品に関する英文雑誌を紹介し、最新の情報を提供する。
生化学特論Ⅰ	タンパク質はあらゆる生命現象を司る基本的物質である。生体触媒、生体構造の保持、生体防御物質、情報伝達物質など多様な働きをしている。生化学の発展に伴い、代謝や合成・分解、制御機能などが分子レベルで解明されている。一方、アミノ酸はタンパク質合成の素材としての役割のほか、化学構造や性質の特異性から固有の機能を示すとともに、タンパク質・アミノ酸の特性や機能を高度なレベルで、かつ栄養学的視点も取り入れて講義する。

生化学特論Ⅱ	<p>「生化学特論Ⅰ」に続き、生理活性物質の特性・機能などに関する最近の知識を修得する。具体的には食品や体成分中の特異的な生理活性を示すペプチドを取り上げて、それらの単離・同定、合成、構造・機能相関、応用研究などを最近の英文雑誌を通して抄読する。酵素阻害、酸化抑制、抗菌作用などの生理活性を有するペプチドや関連物質が相次いで見出されると共に、機能性食品あるいは医薬品として実用化へ向けての展開が試みられている。これらについて学習し、英語論文の読解力も養成する。</p>
栄養教育特論Ⅰ	<p>栄養教育の目標は、人々の生活に関わる栄養（食事）、運動、休養、睡眠などの科学的な事実をもとにして、生涯を通じた健康の保持・増進、QOL(quality of life、生活の質)の向上に寄与する適切な食行動の習慣化を図ることにある。ここでは、メタボリックシンドローム、ロコモティブシンドローム、さらにセデントリー・デス・シンドローム（座りすぎが死につながる症候群）の予防を目的とした健康教育・栄養教育について、わが国の栄養行政や最新の知見を交えながら概説する。また個人や地域、集団を対象とした栄養教育の場においても、問題点の改善に活用できる行動科学的な理論・モデル及び行動修正技法についても修得し、生活習慣病の予防における栄養教育の役割を理解して、栄養アセスメント及び栄養教育計画を的確に実施できるスキルの修練も目指したい。</p>
栄養教育特論Ⅱ	<p>生活習慣病の予防には、遺伝、環境要因及び食生活を主とするライフスタイルなど、さまざまな要因が関連している。これらの要因と生活習慣病との関連についての疫学研究の成果は、健康教育や栄養教育を計画・実践する際には、情報・資料として必須である。ここでは、栄養疫学の手法についての理解を深めることを目的に、栄養疫学、食環境、疾病予防に関する論文をとりあげ、科学的根拠のある情報を得る能力を養う。また栄養教育の行動科学理論や方法論、国内外の実践的な栄養教育プログラムに関する研究論文や研究報告書を調べて、そのプログラムの特徴と栄養教育効果についての発表を行ない、議論を交えて講義を進める。</p>
薬理学特論Ⅰ	<p>近年では、健康を疾病の対立概念としてよりも、積極的な健康への取り組みへの移行が求められている。このような健康の概念の変化は、栄養・食生活・運動は、多くの生活習慣病との関連が深く、また日々の中でQOLとの関連も深い。薬理学は創薬・育薬などの薬物の疾病治療への応用を視野に入れ、薬物治療の基盤を確立する科学であると定義される。医療現場における栄養管理や指導、リハビリテーションでのチームアプローチを進める上で、基本的な医薬品や薬物療法の理解は必要な知識のひとつである。本講義では、薬物の体内動態および薬理作用を解説し、主な疾病に対する薬物療法について概説する。</p>
薬理学特論Ⅱ	<p>健康日本 21（第二次）の推進において、従来からの食生活の改善や運動習慣の定着等による一次予防に重点を置いた対策を推進するとともに、生活習慣病の発症予防とがん、循環器疾患、糖尿病およびCOPD（慢性閉塞性肺疾患）などのNCD（非感染性疾患）の合併症の発症や症状の進展などの重症化の予防に重点を置いた対策を推進すべきであると提言している。「薬理学特論Ⅱ」では、生活習慣病やNCD疾患における薬物治療の概略とそれに必要な医薬品の作用および薬理作用、副作用について概説する。</p>
解剖生理学特論Ⅰ	<p>生物は自身が生息する環境に適応するために進化してきた。「生物の延長としての環境」、「環境の延長としての生物」という観点に立って、ヒト以外の動物の体の構造を理解することは体の仕組みと働きを知る上で重要である。本特論では、様々な動物の体の構造を人体のものと比較解剖学的に考察し、動物種特有の構造と機能を理解することを目的とする。特に骨格・筋系と運動能力の違い、食性による消化器系の違いを理解する。</p>
解剖生理学特論Ⅱ	<p>卵子と精子の接合により受精卵が発生し、分割し、胚盤胞となって、子宮に着床し、胎子発生が始まる。この一連の発生過程の何処かで、人為的な遺伝子操作を加え、個体レベルで作出する操作を発生工学と呼ぶ。本特論では、発生工学に関する基礎知識を理解し、その歴史、その手法、その成果、その問題点を把握する。特に最近の話題をピックアップし、最新の研究を扱った英語論文を理解する。</p>

リハビリテーション学特論 I	<p>リハビリテーションの概念は大きく変化し、今や単に障害に対する治療・訓練というものではなく、いかに高度に進歩した臓器別専門治療を提供し、年老いても障害をもちながらも、住み慣れたところで安心して自分らしく暮らせるように具現化をすることである。</p> <p>今日のリハビリテーションの最終目標は、安全で質の高い生活の保障であり、理学療法士・作業療法士は健康づくりから疾病予防、そして救急治療から地域生活に至るまで、多職種と共に質の高い医療・介護サービスを提供し、心豊かに安心して暮らしていける地域づくりに寄与しなければならない。ひとは足で歩き、手でさまざまな道具を使い行為を行っている。足と手の機能もその目的遂行のより進化、発達してきた。そしてひとを取り巻く生活環境はその機能に合わせて創り出されてきたとも言える。そのため、何かの原因で本来の機能が障害された場合、さまざまな問題が生じてくる。その問題発生の予防、あるいは解決こそがリハビリテーションの課題となる。こうした観点から「生活支援」という言葉をキーワードとして、地域で人間らしく生きることについて考える。</p>
リハビリテーション学特論 II	<p>今日、リハビリテーションの対象となる患者は、急性期から維持期(慢性期)まで、あるいは新生児から高齢者まで、あらゆる疾患とあらゆる年齢階層に渡っており、特に高齢者においては、なんらかの栄養障害を呈していることが報告されている。このような栄養障害の発症機序に関して疾患・障害と栄養障害との因果関係を検討し、これから離床し、積極的なリハビリテーションを施行される患者に対して、体力や筋力を効率的に改善させ日常生活動作の向上を図るためには、どのような栄養素がどの程度必要であるのか、或いは逆に栄養不足により運動や活動にどのような影響が出てくるのかを調べる。例えば、患者の一日の活動水準の違いによりエネルギー所要量が異なるが、激しい運動を行う場合は糖質と脂質が十分に補充されなければならない。運動すると筋肉は肥大するが、効率よく筋力を付けるためには十分なタンパク質が必要である。また、カルシウムは筋肉の収縮に不可欠であり、不足すると運動中に筋痙攣を起こしたりすることがあるなど、運動中の事故を予防し、効率よく運動を継続するためにもこのような知識を修得することは重要である。疾患固有の栄養障害を知り、栄養障害が運動に及ぼす影響について学習する。</p>
健康運動機能特論 I	<p>健康を前提とする運動機能には日常生活活動を維持あるいは遂行するための能力である体力が強く関連する。これには防衛的、行動的体力としての身体抵抗力、免疫能や運動などの概念が含まれるが、特に運動に関して必要となるエネルギー源は食物からの栄養補給に依存している。日常生活での健康を維持あるいは増進させるための健康づくりには食事と運動のバランスをいかに適切に保つことができるかが基本的原則となる。臨床では低栄養状態にある対象者や高齢者を対象とする際のリハビリテーションにおいて栄養管理に伴う合併症予防や早期回復を促進するための栄養サポートチームによる介入の重要性が認識されつつある。当然、これら対象者の治療に携わる理学療法士・作業療法士にも栄養管理に関わる高度な知識や技術が求められる。この領域では健康づくりのための「食と運動との関連性」、「運動とエネルギー代謝」や「栄養管理の重要性」、「身体と栄養」等について学ぶとともに運動時の筋活動などを通してヒトの動きとの関連を検討する。</p>
健康運動機能特論 II	<p>健康とは、身体的能力だけでなく、社会的・個人的な面での資源という点を重視した前向きな考え方である。高齢社会において、平均寿命と健康寿命の格差(不健康寿命)が問題となっている。日々の生活環境にうまく対処する手段として、健康づくり(ヘルスプロモーション)が強調されているところである。ヘルスプロモーションとは、人々が自らの健康をさらにうまくコントロールし、改善していけるようになるプロセスであり、ただ保健医療部門にゆだねられる責務というよりは、健康的なライフスタイルをさらに越えて、幸福(well-being)にまで及ぶものである。人が身体的、精神的、社会的に健全な状態に到達するには、個々人や集団が、望みを明確にし、それを実現し、ニーズを満たし、環境を変え、それにうまく対処していくことができなければならない。介護予防事業等における効果的で、継続性のある運動、口腔、栄養等に関するプログラムの検討や環境づくりの検証を行なう。</p>

神経障害支援特論 I	<p>リハビリテーションの対象には片麻痺や脊髄損傷などの中枢神経疾患をはじめとして、神経・筋疾患、心機能・呼吸機能の障害を有する内部疾患など多岐に亘っている。これらの疾患では運動障害だけでなく自律神経障害を有することも多い。自律神経は血圧や呼吸の調整を行うことから運動負荷時の呼吸・循環反応は運動療法の治療方法やその効果の判断指標として用いることが可能である。本講座では神経疾患に対する理学療法・作業療法の介入の影響や効果を自律神経活動の分析を通して検討する。</p>
神経障害支援特論 II	<p>リハビリテーションの対象の中でも、片麻痺や脊髄損傷などの中枢神経疾患患者において、運動障害や高次脳機能障害に対する、機能回復のメカニズムや、その治療方法について、最近のニューロリハビリテーション領域の発展は目覚ましいものがある。本講座では、運動障害の中でも特に上肢機能の障害や高次脳機能障害のメカニズムを最近の知見から理解し、理学療法・作業療法の介入の影響や効果をニューロリハビリテーションの観点から検証し、より効果的な介入方法を検討する。</p>
地域活動支援特論 I	<p>地域活動支援特論 I では、地域住民の健康増進や高齢・障害児者が、期待される最良の心身の状況を獲得し、年齢や障害の程度に応じ、その地域に住む方々と協働する支援技術について討議・探求する。</p> <p>前半は、高齢者の介護予防や地域在住障害者の医療保健福祉の視点から、①評価およびニーズ把握と支援技術の分析、②生活の場の診断と課題分析、③活動支援と生活の場とを統合する技術の概説・討議することで、医療・生活の両面からの継続支援と統合機能について論考する。</p> <p>後半では、母子保健事業および特別支援教育における支援技術について、①心身の発達面や学習面に課題のある子どもに対するアセスメントの選択・実施・解釈および支援技術の分析、②家庭および保育所、幼稚園、学校など生活の場における課題分析、③子どもと家族が地域で安心安全に生活していくために必要な関連職種との連携について討議・論考する。</p>
地域活動支援特論 II	<p>わが国は急速な高齢化に伴い、要介護高齢者や認知症高齢者が増加しており、早期診断の推進と適切なリハビリテーション・ケアの研究開発と普及、家族支援を含めた地域社会生活支援体制の構築などの高齢者・認知症対策が急務となっている。</p> <p>前半は、認知機能障害について、特に高次脳機能障害者のリハビリテーションや環境整備のあり方について、現状の実践とエビデンスの確立状況を討議・論考する。</p> <p>後半では、予防・家族支援・リハビリテーションとケア、介護などをキーワードとして、高齢障害児者のための家族や生活支援技術について、在宅医療の事例演習を中心に討議を行い、家族学実践学について事例演習の推敲から、リハビリテーション家族学を論考する。</p>
環境健康生活特論 I	<p>心身機能の多様な障害は健康生活遂行の阻害要素となり、障害を持つ者の生活に多様な障害を惹起する。また、生活障害の現れ方・感じ方は、年齢・性別、生活歴、物理的・社会的な生活環境の違い等により各人各様であり日常における生活動作の遂行から主体的な社会参加までの幅広い生活行為において定型化されるものではない。このため多様な生活障害の評価とその改善のための企画立案はクライアント個別の価値観に対応した支援が求められる。そのため、個別の障がい者の支援については、主体者を支援するという支援理念に基づいた技術面からの多面的かつ具体的な解決策の提案が必要である。ADL や APDL に代表される生活行為の方法の適切な選択や新たな開発が求められ、それらに対応する自助具・福祉用具の開発、家屋改造等の環境調整、ニーズに応じた移動手段の獲得や開発、ノーマライゼーションを保障するまち作り等について幅広く学習する。</p>

環境健康生活特論 II	<p>障害者や高齢者の生活環境について、在宅生活を支える様々な社会サービスを理解するとともに、住環境整備に対する法的制度（介護保険制度）、高齢者や障害者の身体的・心理的特性の理解、疾病別・障害別の住環境整備のあり方などを学ぶ。さらに、住環境整備の共通基本技術として、手すりの取り付けや段差の解消、福祉用具の活用などを学ぶ。演習課題として、事例を通して住宅改修における見取り図作成や福祉用具の製作を行い、生活支援のあり方を検討していく。講義形式にとらわれず、症例検討を中心に住環境整備のあり方を提示していく。</p> <p>その他の課題として、フィンランドとオーストラリアの福祉施策の実情を紹介し、わが国の福祉施策との対比の中より、今後の高齢社会における我が国の取り組みについて議論を交えていく。</p>
小児リハビリテーション支援特論 I	<p>主に脳性麻痺や重症心身障害をはじめとする、神経系疾患に伴う姿勢や運動の障害を持つ子ども達に対する介入法の効果判定や生理学的・計測学的評価について探求する（成人年齢に達する者も含む）。また、乳幼児期から学童期までの地域支援に関わる課題抽出・分析、支援計画・実施について討議・検討する。</p> <p>研究に対しては、介入法の効果判定に必要な研究デザインの知識を修得するため、文献研究に基づいて、各論文の研究デザインの解説を演習形式で行っていく。また生理学的・計測学的評価についても文献研究と演習形式で手技の確立に努める。また、医療モデルの限界に触れながら、社会的環境の変化に応じた家族指導や関連職種との連携など地域での包括的支援について概観する。</p>
小児リハビリテーション支援特論 II	<p>主に脳性麻痺や重症心身障害をはじめとする、神経系疾患に伴う姿勢や運動の障害を持つ子ども達に対する介入法の効果判定や生理学的・計測学的評価について探求する（成人年齢に達する者も含む）。また、乳幼児期から学童期までの地域支援に関わる課題抽出・分析、支援計画・実施について討議・検討する。</p> <p>研究に対しては、修士論文テーマに関連する文献研究や修士論文の研究デザインに沿って、発表を交えながら支援の課題や方法を討議する。また、何らかの発達上の課題を抱えた子どもとその家族が安心安全に地域で生活していくために、母子保健事業や特別支援教育を基盤として活用できる制度、課題分析、多職種連携、支援技法について検討・討議する。</p>
精神科リハビリテーション学特論 I	<p>地域精神保健の視点より、急性期医療から地域生活移行・定着および再発予防までシームレスなリハビリテーションサービスを提供するための展開方法や技術を探求する。</p> <p>「精神科リハビリテーション学特論 I」では、精神障害者の急性期医療から地域生活移行・定着までの医療および精神保健技術について、急性期医療の事例演習や北九州市保健福祉局の地域支援体制づくりの取り組み実践を振り返りながらの概説・討議を行う。また、修士論文テーマに関連する論文検索・推敲により、地域に働きかける専門職の役割機能を論考する。</p>
精神科リハビリテーション学特論 II	<p>「精神科リハビリテーション学特論 II」では、高齢・障害者のための地域拠点づくり（地域包括支援センター）の現状を踏まえながら、精神障害者の地域移行に求められる保健医療福祉連携技術について、事例検証による地域支援体制づくりや多職種連携の実践の概説・討議を行う。更に、関連法制度に基づいた事業実施計画から事業成果までの取り組み方や、対象疾患の特性に応じた地域活動支援技術を探求する。また、修士論文テーマに沿って、「地域をみる視点」「地域に働きかける姿勢」「専門職としての役割」を論考することで、修士論文の考察を深めていく。</p>

授 業 科 目 名	健康科学特別講義 I		
担 当 者 名	食物栄養学部教員、リハビリテーション学教員		
科 目 コ ー ド	1900037	授 業 形 態	講義
学 年	1	開 講 期	前期
単 位 数	2	履 修 方 法	必修
授業の概要と方法	健康科学特別講義 I はオムニバス形式で、「食」と「リハビリテーション」の観点から、健康をテーマに各専門分野での現状と課題について講義する。 ただし、食物栄養学部教員の場合は、北キャンパスで開講する。リハビリテーション学部教員の場合は南キャンパスで開講する。		
授業の到達目標	健康科学分野における「リハビリテーション」と「食」の専門知識および最新の研究情報などを習得する。		
授 業 計 画 ※講義の内容は変更になる場合があります。			
1.	健康科学特別講義概要		(杉元)
2.	健康科学特別講義 食物栄養学 I		(原)
3.	健康科学特別講義 食物栄養学 II		(池本)
4.	健康科学特別講義 食物栄養学 III		(柳原)
5.	健康科学特別講義 食物栄養学 IV		(渡邊)
6.	臨床分野における運動能力と栄養の関係 (各研究分野からのディスカッション)		(高橋)
7.	今、なぜ、地域包括ケアシステムなのか? : 在宅生活の限界点と対応強化のミニ討議		(大丸)
8.	運動器疾患における臨床での現状と課題について		(石橋)
9.	勤労者の健康科学: 産業保健分野における予防的リハビリテーション		(廣滋)
10.	リハビリテーション医療におけるサルコペニアの概念		(大峯)
11.	健康増進法と「健康日本 21」の取り組み		(渕)
12.	小児リハビリテーション① (脳性麻痺に対する栄養指導: 文献紹介)		(奥田)
13.	小児リハビリテーション② (乳幼児健診について)		(佐野)
14.	健康づくりにおけるリハビリ専門職の役割と課題		(橋元)
15.	健康科学特別講義まとめ		(高橋)
成績評価の方法 [評価項目と割合]			
授業への取り組み姿勢	レポート		
70%	30%		
授業外で行うべき学習 (準備学習・事後学習等)			
1) 担当教員は、次の授業までに行うべき予習・復習について指示します。 2) 論文抄読は、関連論文や参考書など利用して論文内容の予習しておくこと。			
使用テキスト			
書籍名	著者	出版社	
使用しない			
参考書又は参考資料等			
・講義資料については、講義毎に配布する。			
そ の 他 (受講生への要望等) / 課題等に対するフィードバックについて			
質問等のある場合は、各担当教員のオフィスアワーの時間で対応することになっているので、講義の前後若しくはメール等で事前に担当教員に連絡下さい。			
担当教員の連絡先等			
担当教員 E-mail	その他		
yasushi@knwu.ac.jp			

授 業 科 目 名	健康科学特別講義Ⅱ		
担 当 者 名	リハビリテーション学教員、食物栄養学部教員		
科 目 コ ー ド	1900038	授 業 形 態	講義
学 年	1	開 講 期	後期
単 位 数	2	履 修 方 法	選択
授業の概要と方法	健康科学特別講義Ⅰはオムニバス形式で、「リハビリテーション」と「食」について健康科学特別講義Ⅰで学んだことをさらに発展させ、最新の研究情報を各専門分野から提供し、それぞれの分野が抱える問題点について論議する。研究発表のプレゼンテーションを行う。 ただし、食物栄養学部教員の場合は、北キャンパスで開講する。リハビリテーション学部教員の場合は南キャンパスで開講する。		
授業の到達目標	健康科学分野における「リハビリテーション」と「食」の専門知識および最新の研究情報などを習得する。		
授 業 計 画 ※講義の内容は変更になる場合があります。			
1.	講義概要		(高橋)
2.	精神面・身体面への刺激に対する自律神経活動の把握		(高橋)
3.	運動器疾患に対する最新知見と問題点の把握と課題の整理		(石橋)
4.	勤労者の健康科学：作業関連性筋骨格系障害に対する理学療法		(廣滋)
5.	高齢者・障害者とサルコペニア		(大峯)
6.	リハビリテーション栄養・概要と適応		(淵)
7.	小児リハビリテーション①（脳性麻痺に対する栄養指導：文献抄録）		(奥田)
8.	小児リハビリテーション②（乳幼児健診の効果と課題）		(佐野)
9.	行政研究： 補装具費支給制度・高次脳機能障害・地域保健総合推進事業・高齢者ケアシステム等		(大丸)
10.	リハビリテーション専門職の現状と課題		(橋元)
11.	食物栄養学Ⅰ		(渡邊)
12.	食物栄養学Ⅱ		(柳原)
13.	食物栄養学Ⅲ		(池本)
14.	食物栄養学Ⅳ		(渡邊)
15.	食物栄養学Ⅴ		(杉元)
成績評価の方法〔評価項目と割合〕			
授業への取り組み姿勢	レポート		
70%	30%		
授業外で行うべき学習（準備学習・事後学習等）			
1) 担当教員は、次の授業までに行うべき予習・復習について指示します。			
2) 論文抄読は、関連論文や参考書など利用して論文内容の予習しておくこと。			
使用テキスト			
書籍名	著者	出版社	
使用しない			
参考書又は参考資料等			
・講義資料については、講義毎に配布する。			
そ の 他（受講生への要望等）／課題等に対するフィードバックについて			
質問等のある場合は、各担当教員のオフィスアワーの時間で対応することになっているので、講義の前後若しくはメール等で事前に担当教員に連絡下さい。			
担当教員の連絡先等			
担当教員 E-mail	その他		
s-takahashi@knwu.ac.jp（高橋）			

授 業 科 目 名	健康科学研究法特論 I		
担 当 者 名	食物栄養学部教員、リハビリテーション学部教員		
科 目 コ ー ド	1900050	授 業 形 態	講義
学 年	1	開 講 期	前期
単 位 数	2	履 修 方 法	必修
授業の概要と方法	健康科学分野に寄与できる研究テーマの選択、データ収集、統計処理など研究デザインに関する一連の方法、ならびにプレゼンテーションや修士論文執筆の方法などについて教授する。 ただし、食物栄養学部教員の場合は、北キャンパスで開講する。リハビリテーション学部教員の場合は南キャンパスで開講する。		
授業の到達目標	1) 修士論文のテーマに従った研究方法および進め方について習得し、実践する。 2) データの収集法と解析法などを学習し、修士論文の発表・執筆出来る素養を養う。		
授 業 計 画	※講義の内容は変更になる場合があります。		
1.	研究法特論概要		(杉元)
2.	研究法・栄養学 I		(原)
3.	研究法・栄養学 II		(池本)
4.	研究法・栄養学 III		(柳原)
5.	研究法・栄養学 IV		(渡邊)
6.	リハビリテーション専門職に求められていること		(橋元)
7.	PECO と FINER : 各自の研究計画考案シート作成・発表と意見交流および課題整理		(大丸)
8.	義肢・装具領域の研究テーマの知見から学ぶ		(大峯)
9.	育児期の母親を対象にした質問紙票調査法 質問紙票の作成と実施方法		(佐野)
10.	運動器疾患に関する研究デザインの把握と研究の進め方について		(石橋)
11.	実験系研究デザインの検討：クロスオーバーデザイン		(廣滋)
12.	自律神経活動の研究法について		(高橋)
13.	小児リハビリテーションの研究法① (計測学的データ収集：文献紹介)		(奥田)
14.	高齢者の健康を考える・認知機能の評価と研究の進め方		(渕)
15.	研究法特論まとめ		(高橋)
成績評価の方法〔評価項目と割合〕			
授業への取り組み姿勢	レポート		
70%	30%		
授業外で行うべき学習 (準備学習・事後学習等)			
1) 模擬論文の課題については、指導教員とディスカス後決定し、講義資料や参考書など利用して模擬論文を作成する。 2) 模擬論文については、本講義で論文内容を発表する。			
使用テキスト			
書籍名	著者	出版社	
使用しない			
参考書又は参考資料等			
・講義資料については、講義毎に配布する。			
そ の 他 (受講生への要望等) / 課題等に対するフィードバックについて			
1) 授業内容について理解できない箇所がある場合は、講義やオフィスアワー時に質問して下さい。 2) レポートを課した場合は、提出期限を厳守して下さい。			
担当教員の連絡先等			
担当教員 E-mail	その他		
yasushi@knwu.ac.jp (杉元)			



授 業 科 目 名	健康科学研究法特論Ⅱ		
担 当 者 名	リハビリテーション学部教員、食物栄養学部教員		
科 目 コ ー ド	1900051	授 業 形 態	演習
学 年	1	開 講 期	後期
単 位 数	2	履 修 方 法	選択
授業の概要と方法	修士論文研究を遂行するにあたり、各教員が関連する実験方法や研究法について実践を踏えて解説する。食とリハビリテーションにおける臨床医学領域での具体的な例を挙げて学修する。ただし、食物栄養学部教員の場合は、北キャンパスで開講する。リハビリテーション学部教員の場合は南キャンパスで開講する。		
授業の到達目標	1. 自らの修士論文テーマについての研究法を習得する。 2. 健康と栄養、リハビリテーションについて管理栄養士あるいは理学療法士、作業療法士がそれぞれ果たす高度な役割について理解する。		
授 業 計 画			
1.	健康科学研究法特論演習概要		(高橋)
2.	在宅・施設における介護サービスの現状		(橋元)
3.	各自研究計画の予測結果と考察計画の検討：研究計画考案シートの再修正と推敲		(大丸)
4.	高齢者・障害者の事例から学ぶ義肢・装具の活用		(大峯)
5.	育児ストレス関連論文の精読とグループ討議		(佐野)
6.	研究テーマに関する運動学的視点からの情報交換と課題の整理		(石橋)
7.	研究進捗状況に応じたクリティカルリーディングとディスカッション		(廣滋)
8.	自律神経活動のデータ収集と分析（測定機器の機能と特徴、測定）		(高橋)
9.	小児リハビリテーションの研究法（計測学的データ収集演習）		(奥田)
10.	脳活動の評価とその解析		(澁)
11.	健康科学研究法演習食物栄養学Ⅰ		(池本)
12.	健康科学研究法演習食物栄養学Ⅱ		(渡邊)
13.	健康科学研究法演習食物栄養学Ⅲ		(柳原)
14.	健康科学研究法演習食物栄養学Ⅳ		(渡邊)
15.	健康科学研究法演習食物栄養学Ⅴ まとめ		(杉元)
成績評価の方法〔評価項目と割合〕			
授業姿勢	レポート		
70%	30%		
授業外で行うべき学習（準備学習・事後学習等）			
・各回の講義にて、事後学修等について連絡をします。			
使用テキスト			
書籍名	著者	出版社	
・適宜資料を配布。			
参考書又は参考資料等			
・講義の進度に合わせて、適宜紹介します。			
そ の 他（受講生への要望等）／課題等に対するフィードバックについて			
・担当教員へ質問等がある場合、オフィスアワーの時間もしくは、メール等で事前に連絡して下さい。			
担当教員の連絡先等			
担当教員 E-mail	その他		
s-takahashi@knwu.ac.jp（高橋）			

授 業 科 目 名	栄養生理学特論 I		
担 当 者 名	原 研 治	実 務 家 教 員	
科 目 コ ー ド	1900045	授 業 形 態	講義
学 年	1	開 講 期	後期
単 位 数	2	履 修	選択
授業の概要と方法 〔実務家教員についての特記事項含む〕	栄養生理学特論 I では、健康に関わる生体機能の中で多様の生理学的役割を持っているタンパク質の構造と生理機能を理解する。特にエネルギー代謝に関わる酵素やホルモンの情報伝達、免疫や血液凝固などの生体防御の生理機能を理解する。また、それらの遺伝情報と細胞中での発現を理解する。		
授業の到達目標 〔学習成果〕	栄養に関わる代謝酵素、ビタミンやホルモンのシグナル伝達などの生理機能を理解することにより、肥満や病気の要因が理解できるようになる。		
授業計画 ※準備学習（予習・復習 等）の具体的な内容及び必要時間			
1.	栄養に関わる生体分子の概要説明		
2.	蛋白質合成とプロセッシングとシャペロン		
3.	酵素の構造と補酵素（ビタミン）		
4.	ホルモンの構造と生理機能		
5.	ホルモン受容体の生理機能		
6.	エネルギー代謝に関わるホルモンのシグナル伝達		
7.	サイトカインの栄養生理における役割		
8.	エネルギー代謝とそれに関わる酵素及びビタミンの役割		
9.	代謝異常による肥満・疾病		
10.	生体防御-1 酸素傷害の防御・ストレス適応、熱ショック適応免疫		
11.	生体防御-2 免疫反応の基礎・抗体の構造・抗体生産細胞・抗体の利用)		
12.	生体防御-3 血液凝固反応（血液凝固のカスケード）		
13.	核酸の構造・PCR の理論と遺伝子疾患		
14.	遺伝子組み替え・遺伝子工学の基礎と倫理		
15.	初回～14 回の内容にて確認テストを行う。		
準備学習・事後学習等についての補足説明			
対話形式で講義を行うので、予習・復習（特に予習は時間をかけて）しっかりすること。			
成績評価の方法〔評価項目と割合〕			
レポート	授業への取り組み姿勢		
70%	30%		
使用テキスト			
書籍名	著者	出版社	
講義用プリントを事前に配布する			
参考書又は参考資料等			
細胞の分子生物学（THE CELL）第 3 版 KYOIKUSHA、ヴォート生化学 D.Voet 等著 田宮 信雄訳 東京科学同人			
その他 〔受講に際しての注意点、課題（試験やレポート等）に対するフィードバックについて〕			
担当教員の連絡先等			
担当教員 E-mail		その他	
hara-k@knwu.ac.jp			

授 業 科 目 名	栄養生理学特論Ⅱ		
担 当 者 名	原 研 治	実 務 家 教 員	
科 目 コ ー ド	1900046	授 業 形 態	講義
学 年	2	開 講 期	前期
単 位 数	2	履 修	選択
授業の概要と方法 〔実務家教員についての特記事項含む〕	栄養生理学特論Ⅱでは、特論Ⅰの内容に基づき、栄養に関わる生理活性物質の特性・機能などに関する最近の情報を学習する。具体的には生理機能を裏付ける総説や英文の論文を取り上げ、読み解き、その内容を理解する。これらの総説や論文を通して先端的な知識を修得すると共に、読解力も養成する。		
授業の到達目標 〔学習成果〕	<ul style="list-style-type: none"> <li>・エネルギー代謝に関わる酵素やホルモンのシグナル伝達に関わる最近の研究を理解する。</li> <li>・上記に関する（英語）論文を輪読し、理解する。</li> <li>・論文検索、輪読の資料作り及び発表を通して、修士として十分な実力を培う</li> </ul>		
<b>授業計画 ※準備学習（予習・復習等）の具体的な内容及び必要時間</b>			
1.	科学論文の抄読について：科学論文の構成、表現などの説明		
2.	論文の抄読・質疑応答及び考察・解説（1）（エネルギー代謝）		
3.	論文の抄読・質疑応答及び考察・解説（2）（エネルギー代謝と疾患）		
4.	論文の抄読・質疑応答及び考察・解説（3）（代謝酵素）		
5.	論文の抄読・質疑応答及び考察・解説（4）（代謝酵素と疾患）		
6.	論文の抄読・質疑応答及び考察・解説（5）（ビタミン）		
7.	論文の抄読・質疑応答及び考察・解説（6）（ビタミンと疾患）		
8.	論文の抄読・質疑応答及び考察・解説（7）（ホルモンとシグナル伝達）		
9.	論文の抄読・質疑応答及び考察・解説（8）（ホルモンとシグナル伝達）		
10.	論文の抄読・質疑応答及び考察・解説（9）（儉約遺伝子）		
11.	論文の抄読・質疑応答及び考察・解説（10）（肥満）		
12.	論文の抄読・質疑応答及び考察・解説（11）（免疫）		
13.	論文の抄読・質疑応答及び考察・解説（12）（遺伝子操作）		
14.	論文の抄読・質疑応答及び考察・解説（13）（遺伝子改変食物）		
15.	全体のまとめ。		
<b>準備学習・事後学習等についての補足説明</b>			
資料を用いての講義及び輪講なので英語論文の予習をしっかり行うこと。			
<b>成績評価の方法〔評価項目と割合〕</b>			
レポート	授業への取り組み姿勢		
50%	50%		
<b>使用テキスト</b>			
書籍名	著者	出版社	
講義用プリント及び講読用論文を事前に配布する。			
<b>参考書又は参考資料等</b>			
細胞の分子生物学（THE CELL）第3版 KYOIKUSHA、ヴォート生化学 D.Voet 等著 田宮 信雄訳 東京科学同人			
<b>その他〔受講に際しての注意点、課題（試験やレポート等）に対するフィードバックについて〕</b>			
配布したプリント及び論文に予め読んでおく			
<b>担当教員の連絡先等</b>			
担当教員 E-mail	その他		
hara-k@knwu.ac.jp			

業 科 目 名	臨床栄養学特論 I		
担 当 者 名	池本 美智子		
科 目 コ ー ド	1900001	授 業 形 態	講義
学 年	1	開 講 期	前期
単 位 数	2	履 修 方 法	選択
授業の概要と方法	高齢化社会を迎え、各種の栄養障害を抱えた患者が増加してきています。人体には「生きる力」があります。この力を発揮するためには体外から取り入れる栄養素が不可欠です。ここでは、色々な疾患について栄養状態の評価、栄養補給法の選定などの栄養管理について理解し、症例を用いてさまざまな栄養療法について検討します。		
授業の到達目標	生体内での代謝を理解し、その異常である疾病を理解する。その上で栄養評価・栄養管理法解説する。消化器系の手術手技とその特徴、経口、経腸および経静脈を用いた栄養管理法の実際を論理的に理解させる。		
授 業 計 画			
1.	栄養管理の重要性と栄養アセスメント		
2.	サルコペニアとリハビリテーション栄養		
3.	栄養投与法の種類とその特徴		
4.	栄養投与法の選択		
5.	静脈・経腸栄養と合併症		
6.	消化器疾患の栄養ケア I (肝疾患)		
7.	消化器疾患の栄養ケア II (消化器術後)		
8.	代謝疾患の栄養ケア		
9.	呼吸器疾患の栄養ケア (COPD)		
10.	循環器疾患の栄養ケア		
11.	腎疾患の栄養ケア I (CKD)		
12.	腎疾患の栄養ケア II (透析)		
13.	がんの栄養ケア		
14.	血液疾患の栄養ケア (血液・造血器疾患)		
15.	まとめ		
成績評価の方法〔評価項目と割合〕			
レポート	授業への取組み姿勢		
80%	20%		
授業外で行うべき学習 (準備学習・事後学習等)			
・解剖生理や疾病、および疾病における代謝の変化について理解しておくこと。			
使用テキスト			
書籍名	著者	出版社	
・適宜プリント等教材を配布する。			
参考書又は参考資料等			
○「治療に生かす！栄養療法ははじめの一步」清水健一郎 (羊土社)			
○「ビジュアル栄養療法 (メカニズムからわかる治療戦略)」丸山千寿子、中屋豊 (南江堂)			
そ の 他 (受講生への要望等) / 課題等に対するフィードバックについて			
・疾患と栄養の関連を理解し、解剖生理にも十分な理解をもって臨んでほしい。			
・提出課題等については、適宜評価し、本人にフィードバックする。			
担当教員の連絡先等			
担当教員 E-mail	その他		
ikemoto@knwu.ac.jp			

授 業 科 目 名	臨床栄養学特論Ⅱ		
担 当 者 名	池本 美智子		
科 目 コ ー ド	1900002	授 業 形 態	講義
学 年	1	開 講 期	後期
単 位 数	2	履 修 方 法	選択
授業の概要と方法	近年、アレルギー疾患が急増している。その理由として①住環境の変化、②食環境の変化、③精神環境の変化、④体質の変化などが挙げられている。 免疫疾患のひとつである食物アレルギーについて管理栄養士としての専門性を深めるため、主要アレルゲンについて深く学ぶとともに、論文抄読を通し、読解力、文章力を身につける。		
授業の到達目標	「食」に携わる管理栄養士として、食物アレルギーについてどのような場面においても、科学的根拠をふまえ、安心・安全な「食」の提案が出来なければならない。そのための実践力を身につける。		
授 業 計 画			
1.	オリエンテーション		
2.	免疫疾患と食物アレルギー		
3.	文献検索		
4.	食物アレルギーの発生機序		
5.	食物アレルギー各論（卵アレルギー）		
6.	食物アレルギー各論（牛乳アレルギー）		
7.	食物アレルギー各論（小麦アレルギー）		
8.	食物アレルギー各論（大豆アレルギー）		
9.	食物アレルギー各論（エビ・カニアレルギー）		
10.	食物アレルギー各論（ソバ・米アレルギー）		
11.	食物アレルギー各論（多種食物アレルギー）		
12.	保育所・学校におけるアレルギー対応		
13.	臨床におけるアレルギー対応		
14.	論文抄読と考察		
15.	まとめ		
成績評価の方法〔評価項目と割合〕			
レポート	授業への取り組み姿勢		
80%	20%		
授業外で行うべき学習（準備学習・事後学習等）			
・近年、免疫異常に関する疾患が増加しているので、免疫学についても学んでおいてほしい。			
使用テキスト			
書籍名	著者	出版社	
・適宜プリント等教材を配布する。			
参考書又は参考資料等			
○「食物アレルギー診療ガイドライン 2016」（協和企画）			
○「食物アレルギーの栄養指導の手引き」（食物アレルギー研究会）			
そ の 他（受講生への要望等）／課題等に対するフィードバックについて			
・新聞等でアレルギーについて良く報道されているので注意して、理解するように。			
・提出課題等については、適宜評価し、本人にフィードバックする。			
担当教員の連絡先等			
担当教員 E-mail	その他		
ikemoto@knwu.ac.jp			

授 業 科 目 名	食品学特論 I		
担 当 者 名	杉元 康志		
科 目 コ ー ド	1900003	授 業 形 態	講義
学 年	1	開 講 期	前期
単 位 数	2	履 修 方 法	選択
授業の概要と方法	食品について多面的な観点から学ぶ。栄養的意義、二次機能および三次機能について詳しく解説し、ヒトの健康と食品の持つ潜在的機能について学修する。「食品学特論 I」では食品成分の化学的なアプローチを中心に、食品の機能について最新の情報を提供する。		
授業の到達目標	1) 食品成分の構造と機能を理解する。 2) 食品の潜在的機能を理解する。 3) 食品機能性成分のヒトの健康との関連性について理解する。		
授 業 計 画	※講義の内容は変更になる場合があります。		
1.	人間と食品（歴史、食物連鎖、栄養健康、食嗜好、環境）		
2.	食品成分①（タンパク質の構造と機能）		
3.	食品成分②（タンパク質の機能）		
4.	食品成分③（糖質の構造と機能）		
5.	食品成分④（脂質の構造と機能）		
6.	食品成分⑤（ビタミンの構造と機能）		
7.	食品成分⑥（ミネラルの機能）		
8.	食と健康①（食品成分の三次機能－概論）		
9.	食と健康②（食品成分の三次機能－抗酸化作用）		
10.	食と健康③（食品成分の三次機能－代謝調節作用）		
11.	食と健康④（食品成分の三次機能－脂質代謝機能）		
12.	食と健康⑤（食品成分の三次機能－免疫調節作用）		
13.	食と健康⑥（食品成分の三次機能－老化防止作用）		
14.	機能性食品（保健機能食品、特別用途食品、特定保健用食品）		
15.	まとめ		
成績評価の方法〔評価項目と割合〕			
口頭試問	課題レポート・小テスト		
50%	50%		
授業外で行うべき学習（準備学習・事後学習等）			
・食品について深い知識を身につけるため、適宜課題を提供する。参考書や資料を活用し、図書館やインターネットで調査研究し、レポートを作成を提出させることがある。講義に関連した内容についての予習・復習を十分に行うこと。			
使用テキスト			
書籍名	著者	出版社	
食品機能学	青柳康夫	建帛社	
参考書又は参考資料等			
○「食べ物と健康」 田島真（同文書院） ・関係資料を配布する。			
そ の 他（受講生への要望等）／課題等に対するフィードバックについて			
成績評価については、各講義内容について口頭試問を行うとともに、課題レポート、小テストの結果及び授業に取り組む姿勢などを加味して、総合的に評価する。受講に際しては、主として、テキスト及び資料をもとに、学習を行うとともに、適宜質疑応答を行う。課題を与えるので、図書館、インターネット等で調べ、レポートを作成するとともにそのレポート内容について質疑応答を行う。また、定期的に小テストを実施する。			
担当教員の連絡先等			
担当教員 E-mail	その他		
yasushi@knwu.ac.jp			

授 業 科 目 名	食品学特論Ⅱ		
担 当 者 名	杉元 康志		
科 目 コ ー ド	1900004	授 業 形 態	講義
学 年	1	開 講 期	後期
単 位 数	2	履 修 方 法	選択
授業の概要と方法	食品について応用面の観点から学ぶ。貯蔵中や加工中の食品成分の変化について詳しく解説し、食品の持つ潜在的機能とヒトへの応用について学修する。「食品学特論Ⅱ」では最新の発酵の開発、食品バイオテクノロジーの基礎と技術、食品に関する英文科学雑誌を紹介し、最新の情報を提供する。		
授業の到達目標	1) 食品成分の変化を理解する。 2) 最新の発酵食品について知る。 3) バイオテクノロジーについて基礎と技術を理解する。 4) 欧文学術雑誌を読めるように努める。		
授 業 計 画 ※講義の内容は変更になる場合があります。			
1.	食品加工における諸問題		
2.	食品成分の変化① 水分、糖質		
3.	食品成分の変化② タンパク質 1		
4.	食品成分の変化③ タンパク質 2		
5.	食品成分の変化④ 脂質		
6.	食品成分間反応（酸化、酵素による変化、非酵素的褐変、成分間反応）		
7.	食品における最新のトピックス①		
8.	食品における最新のトピックス②		
9.	食品とバイオテクノロジー①		
10.	食品とバイオテクノロジー②		
11.	食品とバイオテクノロジー③		
12.	英文科学論文購読①		
13.	英文科学論文購読②		
14.	英文科学論文購読③		
15.	まとめ		
成績評価の方法〔評価項目と割合〕			
口頭試問	課題レポート・小テスト	その他	
50%	40%	10%	
授業外で行うべき学習（準備学習・事後学習等）			
・食品について深い知識を身につけるため、適宜課題を提供する。参考書や資料を活用し、図書館やインターネットで調査研究し、レポートを作成を提出させることがある。講義に関連した内容についての予習、復習を十分に行うこと。			
使用テキスト			
書籍名	著者	出版社	
使用しない			
参考書又は参考資料等			
○「食べ物と健康」 田島眞（同文書院） ○「ベーシックマスター分子生物学」東中川徹 他（オーム社） ・関係資料を配布する。			
そ の 他（受講生への要望等）／課題等に対するフィードバックについて			
※成績評価については、各講義内容について口頭試問を行うとともに、課題レポート、小テストの結果及び授業に取り組む姿勢などを加味して、総合的に評価する。 ・受講に際しては、主として、テキスト及び資料をもとに、学習を行うとともに、適宜質疑応答を行う。課題を与えるので、図書館、インターネット等で調べ、レポートを作成するとともにそのレポート内容について質疑応答を行う。また、定期的に小テストを実施する。			

担当教員の連絡先等	
担当教員 E-mail	その他
yasushi@knwu.ac.jp	



授 業 科 目 名	生化学特論 I		
担 当 者 名	渡邊 啓一		
科 目 コ ー ド	1900007	授 業 形 態	講義
学 年	1	開 講 期	前期
単 位 数	2	履 修 方 法	選択
授業の概要と方法	生化学は、生命現象を化学的に分子レベルで解明・理解しようとする学問であり、微生物からヒトに至るまでの生物の科学と応用技術の基礎となり、健康栄養学の基本をなすものである。本特論では、代謝、代謝調節および情報伝達に関わるタンパク質や生理活性物質を対象として、それらの分子構造に基づいて機能発現機構を明らかにするための研究手法と成果について理解することを目的とする。各項目に関して背景や確立された基礎的内容を生化学のテキストを使用して理解する。次に、各項目に関わるタンパク質の分子構造に基づいて機能発現機構を明らかにした原著論文を選び、その研究手法、成果、考察、問題点について討論する。		
授業の到達目標	1) 代謝、代謝調節、情報伝達に関してこれまでに確立された基礎的内容を理解する。 2) 健康栄養学の観点から自分の関心がある課題に対して、最新の分子レベルで得られた研究論文や総説を読み、理解し、説明し、討論することができる。		
授 業 計 画	※講義の内容は変更になる場合があります。		
1.	代謝調節概論	※事前事後学習については毎回、前の週に指示する。	
2.	酵素活性のアロステリック調節		
3.	シグナル伝達の分子機構		
4.	受容体酵素による情報伝達		
5.	Gタンパク質共役型受容体と二次メッセンジャー		
6.	視覚、臭覚、味覚のシグナル伝達		
7.	リン酸化による調節機構		
8.	ステロイドホルモンによる転写調節		
9.	プロテインキナーゼによる細胞周期の調節		
10.	がん遺伝子、がん抑制遺伝子、プログラム化された細胞死		
11.	代謝の統合とホルモンによる調節 (1)		
12.	代謝の統合とホルモンによる調節 (2)		
13.	最新論文のプレゼンテーションと討論		
14.	最新論文のプレゼンテーションと討論		
15.	最新論文のプレゼンテーションと討論		
成績評価の方法〔評価項目と割合〕			
レポート	プレゼンテーション	討論	
40%	40%	20%	
授業外で行うべき学習（準備学習・事後学習等）			
・課題に対する学生のプレゼンテーションと討論、教員による説明を組み合わせる授業を行う。			
使用テキスト			
書籍名	著者	出版社	
適時、学術論文、総説を選択して使用する。			
参考書又は参考資料等			
レーニンジャーの生化学 生化学と分子生物学の基本原理、[上][下]、D.L.Nelson, M.M. Cox 著、川寄敏祐 監修、中山和久 編集、廣川書店			
そ の 他（受講生への要望等）／課題等に対するフィードバックについて			
担当教員の連絡先等			
担当教員 E-mail	その他		
watakei@knwu.ac.jp			

授 業 科 目 名	生化学特論Ⅱ		
担 当 者 名	渡邊 啓一		
科 目 コ ー ド	1900008	授 業 形 態	講義
学 年	1	開 講 期	後期
単 位 数	2	履 修 方 法	選択
授業の概要と方法	生命現象の根幹となる働きを担うタンパク質分子の構造と機能発現機構およびその応用に関するこれまでの研究成果について学ぶ。タンパク質科学に関する研究の考え方、手法、成果を健康栄養学領域の技術や研究の基礎として役立てることができるようになることを目的とする。毎回、各項目に関して背景や確立された基礎的内容を生化学のテキストを使用して学ぶ。次に、各項目に関わるタンパク質の分子構造に基づいて機能発現機構を明らかにした原著論文を選び、その研究手法、成果、考察、問題点について討論する。		
授業の到達目標	1) タンパク質の構造と機能の関係とその研究手法について理解する。 2) 健康栄養学の観点から自分の関心がある課題に対して、最新の分子レベルで得られた研究論文や総説を読み、理解し、説明し、討論することができる。		
授 業 計 画	※講義の内容は変更になる場合があります。		
1.	タンパク質の三次構造	※事前事後学習については毎回、前の週に指示する。	
2.	タンパク質の三次構造		
3.	タンパク質のフォールディングと安定性		
4.	タンパク質分子と他の分子の相互作用		
5.	タンパク質の柔軟性、動きと機能Ⅰ	酵素触媒反応	
6.	タンパク質の柔軟性、動きと機能Ⅰ	酵素触媒反応	
7.	タンパク質の柔軟性、動きと機能Ⅱ	情報伝達、調節	
8.	タンパク質の柔軟性、動きと機能Ⅱ	情報伝達、調節	
9.	タンパク質の柔軟性、動きと機能Ⅲ	能動輸送、運動	
10.	タンパク質の柔軟性、動きと機能Ⅲ	能動輸送、運動	
11.	最新論文のプレゼンテーションと討論		
12.	最新論文のプレゼンテーションと討論		
13.	最新論文のプレゼンテーションと討論		
14.	最新論文のプレゼンテーションと討論		
15.	最新論文のプレゼンテーションと討論		
成績評価の方法〔評価項目と割合〕			
レポート	プレゼンテーション	討論	
40%	40%	20%	
授業外で行うべき学習（準備学習・事後学習等）			
・課題に対する学生のプレゼンテーションと討論、教員による説明を組み合わせる授業を行う。			
使用テキスト			
書籍名	著者	出版社	
適時、学術論文、総説を選択して使用する。			
参考書又は参考資料等			
レーニンジャーの新生化学 生化学と分子生物学の基本原則、[上][下]、D.L.Nelson, M.M. Cox 著、川崎敏祐 監修、中山和久 編集、廣川書店			
そ の 他（受講生への要望等）／課題等に対するフィードバックについて			
担当教員の連絡先等			
担当教員 E-mail	その他		
watakei@knwu.ac.jp			

授 業 科 目 名	栄養教育特論 I		
担 当 者 名	池本 美智子		
科 目 コ ー ド	1900009	授 業 形 態	講義
学 年	1	開 講 期	前期
単 位 数	2	履 修 方 法	選択
授業の概要と方法	<p>生活習慣病及び低栄養状態の予防と重症化予防のために必要な栄養教育の知識を蓄積し、スキルを修得することを目的とする。栄養教育の対象となる人々の健康状態や栄養状態を把握し、栄養マネジメント(PDCA)をするための方法を習得する。また生活習慣、主として食行動変容のための技法を理解し、食生活改善の支援ができる資質と能力を習得する。 講義内容をスライド及び配付資料により説明、解説を行い、討議形式を取り入れながら授業展開をする。</p> <p>※本講義は、大学院生臨床栄養師認定研修履修細則に規定する臨床栄養師認定講座の <u>栄養教育（生活習慣病：4時間、低栄養状態：6時間、栄養教育の基本：2時間）及び地域栄養活動:2時間の計14時間として申請できる。</u></p>		
授業の到達目標	<p>1) 栄養教育を展開するうえで必要となる理論的基礎、関連スキル、資質を習得する。  2) 栄養教育と食育の関連を理解し、説明できる。  3) 一次予防、二次予防、三次予防における栄養教育の特徴とその関連を説明できる。  4) 食行動変容の段階と各ステージにおける心理的特徴と援助法を習得し、活用できる。  5) 主に、生活習慣病及び低栄養状態の予防の栄養教育マネジメントの方法を習得し、活用できる。</p>		
授 業 計 画			
1.	栄養教育と健康教育・ヘルスプロモーション、食事摂取基準 2015年版		
2.	栄養教育と食育 食育基本法,食育白書、第三次食育推進基本計画,高齢社会白書		
3.	栄養教育の実際 (1) 集団栄養教育における栄養媒体の特長と作成の実際		
4.	栄養教育の実際 (2) 個人栄養教育における栄養媒体の特長と作成の実際		
5.	栄養教育の実際 (3) 個人栄養教育の実際 (ロールプレイング)		
6.	栄養教育の実際 (4) 個人栄養教育における献立展開の実際		
7.	栄養教育マネジメント(1) 生活習慣病予防,重症化予防のための保健指導・栄養教育 (1) 特定保健指導の実際		
8.	栄養教育マネジメント(2) 生活習慣病予防,重症化予防のための保健指導・栄養教育 (2) 糖尿病、脂質異常症、高血圧症患者の栄養教育のための評価と栄養計画作成		
9.	栄養教育マネジメント(3) 低栄養の対策と栄養教育 (1) 総合的栄養評価法、必要栄養量の設定と栄養療法のあり方、地域包括ケアシステム		
10.	栄養教育マネジメント(4) 低栄養の対策と栄養教育 (2) 健康寿命の延伸と虚弱、サルコペニア予防のための評価と栄養計画作成		
11.	栄養教育マネジメント(5) 低栄養の対策と栄養教育 (3) リハビリテーション栄養管理、急性期病院におけるリハビリテーション栄養管理		
12.	栄養教育マネジメント(5) 低栄養の対策と栄養教育 (4) 回復期リハ病棟・介護老人保健施設のリハビリテーション栄養管理,在宅訪問栄養管理、平成30年度診療報酬医療・介護同時改定		
13.	栄養教育マネジメント(6) 地域連携と保健指導・栄養教育 (1) 地域住民の栄養教育のための栄養評価と食事・栄養計画作成		
14.	栄養教育マネジメント(7) 地域連携と保健指導・栄養教育 (2) 地域連携(自治体、社会福祉協議会及び栄養士会ボランティア活動)の実際		
15.	総括 討議・まとめ 臨床栄養師認定領域内容について受講生によるプレゼンテーション		
成績評価の方法〔評価項目と割合〕			
レポート	プレゼンテーション	積極的な授業への取り組み姿勢 (ディスカッションへの参加状況)	
60%	25%	15%	

授業外で行うべき学習（準備学習・事後学習等）		
事前学習：健康行動及び食行動についての情報収集を心がける。		
事後学習：学習内容を整理して復習を行ない、次週の授業に備えるよう心がける。		
使用テキスト		
書籍名	著者	出版社
使用しない		
参考書又は参考資料等		
・講義で随時提示する。		
その他の（受講生への要望等）／課題等に対するフィードバックについて		
<ul style="list-style-type: none"> <li>・講義は配付資料（研究報告書,文献,資料など）を適宜用いて進行する。ノートパソコンを持参すること。</li> <li>・毎時間、必要な教材・資料として、プリント、冊子などを適宜配付するので、各自ファイリングして活用する。課題のプレゼンテーション時は、発表担当者は事前に資料などの準備を協力して行う。</li> <li>・提出課題等については、適宜評価し、本人にフィードバックする。</li> </ul>		
担当教員の連絡先等		
担当教員 E-mail	その他	
ikemoto@knwu.ac.jp		

授 業 科 目 名	栄養教育特論Ⅱ		
担 当 者 名	池本 美智子		
科 目 コ ー ド	1900010	授 業 形 態	講義
学 年	1	開 講 期	後期
単 位 数	2	履 修 方 法	選択
授業の概要と方法	生活習慣病の予防には、遺伝、環境要因及び食生活を主とするライフスタイルなど、さまざまな要因が関連している。また、低栄養状態においては疾病とともに様々な背景が存在する。ここでは関連の論文をとりあげ、抄読することにより科学的根拠のある情報を得る能力を習得する。また、食事調査法について具体的に取り組み、その結果を以て健康教育・栄養教育プログラムの開発を試みる。		
授業の到達目標	1) エビデンスについて栄養教育に関する症例対照研究、症例検討を読み、理解する。 2) 生活習慣病、およびフレイル、サルコペニアの予防を目的とした食事指導及び栄養教育の効果について科学的根拠のある情報を得る能力を習得する。 3) 生活習慣病やフレイル等の予防・改善対策として、健康教育・栄養教育プログラムの開発を試案する。		
授 業 計 画			
1.	エビデンスとは何か?		
2.	栄養・健康情報と EBN(1) 栄養・健康情報の種類と価値		
3.	栄養・健康情報と EBN(2) 健康・栄養情報の収集の実践		
4.	栄養・健康情報と EBN(3) 健康・栄養情報の教材作成と情報発信・評価		
5.	栄養疫学と疫学研究の方法(1) 栄養疫学とは、食事調査の種類と方法		
6.	栄養疫学と疫学研究の方法(2) 食事調査の実際		
7.	栄養疫学と疫学研究の方法(3) 食事調査と質問票		
8.	栄養疫学と疫学研究の方法(4) 食事調査結果と評価		
9.	栄養疫学と疫学研究の方法(5) 食事調査評価と栄養教育		
10.	栄養教育プログラムの開発の試み(1) 栄養教育プログラムの実践と効果		
11.	栄養教育プログラムの開発の試み(2) 栄養教育プログラムの開発		
12.	栄養教育プログラムの開発の試み(3) 栄養教育プログラムの開発		
13.	「地域包括ケアシステム」、「地域支援事業」(介護保険法)と栄養教育 自立支援の実際(2) 地域包括ケアシステムにおける多職種協働によるケアマネジメントについて		
14.	「地域包括ケアシステム」、「地域支援事業」(介護保険法)と栄養教育 自立支援の実際(3) 在宅での多職種連携,居宅療養管理指導について		
15.	総括 栄養教育プログラムの検索と開発の試案についてプレゼンテーション 討議・まとめ		
成績評価の方法〔評価項目と割合〕			
レポート	プレゼンテーション	積極的な授業への取り組み姿勢 (ディスカッションへの参加状況)	
50%	35%	15%	
授業外で行うべき学習 (準備学習・事後学習等)			
事前学習: 健康行動及び食行動についての情報収集を心がける。 事後学習: 学習内容を整理して、復習を行い、次週の授業に備えるよう心がける。			
使用テキスト			
書籍名	著者	出版社	
使用しない			
参考書又は参考資料等			
・講義で随時提示する。			

その他の (受講生への要望等) / 課題等に対するフィードバックについて	
<ul style="list-style-type: none"><li>・講義は配付資料 (研究報告書, 文献, 資料など) を適宜用いて進行する。ノートパソコンを持参。</li><li>・毎時間、必要な教材・資料として、プリント、冊子などを適宜配付するので、各自ファイリングして活用する。課題のプレゼンテーション時は、発表担当者は事前に資料などの準備を協力して行う。</li><li>・提出課題等については、適宜評価し、本人にフィードバックする。</li></ul>	
担当教員の連絡先等	
担当教員 E-mail	その他
ikemoto@knwu.ac.jp	

授 業 科 目 名	薬理学特論 I		
担 当 者 名	柳原 延章		
科 目 コ ー ド	1900011	授 業 形 態	講義
学 年	1	開 講 期	前期
単 位 数	2	履 修 方 法	選択
授業の概要と方法	<p>医療現場における栄養管理・指導、リハビリテーションでのチームアプローチを進める上で、基本的な薬物療法および静脈経腸栄養法による栄養管理の理解やそれらに使用されている薬剤、栄養剤の薬理学および栄養学的知識は必要不可欠である。本講義では、主に自律神経系および糖尿病の関連薬剤、基本的な経腸・静脈栄養剤の体内動態および薬理作用を解説し、それらの薬物療法および静脈経腸法について概説する。また、薬理学分野の英文論文を抄読し、論文内容の把握と理解力を身に付ける。</p> <p>※本講義は、臨床栄養師認定講座の履修相当科目である経腸・静脈栄養法を含む。</p>		
授業の到達目標	<p>1) 医療従事者として必要な薬剤や経腸及び経静脈栄養剤の知識を習得する。</p> <p>2) 医療従事者として必要な薬物療法および経腸栄養法を習得する。</p>		
授 業 計 画			
1.	自律神経系作用薬①交感神経作用薬・遮断薬		
2.	自律神経系作用薬②副交感神経作用薬・遮断薬		
3.	自律神経系作用薬③筋弛緩薬・節遮断薬		
4.	文献抄読		
5.	薬の体内動態に及ぼす食品の影響①代謝過程など		
6.	薬の体内動態に及ぼす食品の影響②味覚・食欲など		
7.	生活習慣病と薬物治療① 1型糖尿病と薬物療法について		
8.	生活習慣病と薬物治療② 2型糖尿病と薬物療法について		
9.	栄養管理の重要性・栄養アセスメントおよび栄養療法の種類と選択		
10.	経腸・静脈栄養剤の種類と選択		
11.	経腸栄養アクセスの管理・静脈栄養アクセスの管理／カテーテル関連血流感染症の診断と治療		
12.	栄養療法の進め方と評価		
13.	小児の栄養管理		
14.	成人の病態別栄養管理		
15.	まとめ		
成績評価の方法〔評価項目と割合〕			
課題レポート	抄読会英語論文レポート		
80%	20%		
授業外で行うべき学習（準備学習・事後学習等）			
1) 6月末までに、循環器系及炎症に関する薬物のレポートを提出してもらいます。			
2) 次の授業までに行うべき予習・復習について指示します。			
使用テキスト			
書籍名	著者	出版社	
栄養薬理学	田中芳明、中村強 編	建帛社	
参考書又は参考資料等			
○「第10版 Goodman&Gilman 薬理書（上下）」 Laurence Brunton 編、高折修二 訳（廣川書店）			
○「分子神経薬理」（西村書店） ○「New 薬理学」田中千賀子、加藤隆一（南山堂）			
○「NST ガイドブック」日本病態栄養学会編集（メディカルレビュー社）・講義毎に資料を配布する。			
そ の 他（受講生への要望等）／課題等に対するフィードバックについて			
※成績評価については、自律神経系薬物と食品と薬物との相互作用に関するレポートおよび糖尿病・薬物療法および静脈経腸栄養に関するレポート（90%）、文献抄読レポート（10%）各レポートの合計で評価する。			
担当教員の連絡先等			
担当教員 E-mail	その他		
yanagin@knwu.ac.jp			

授 業 科 目 名	薬理学特論Ⅱ		
担 当 者 名	柳原 延章		
科 目 コ ー ド	1900012	授 業 形 態	講義
学 年	1	開 講 期	後期
単 位 数	2	履 修 方 法	選択
授業の概要と方法	健康日本 21（第二次）の推進において、従来からの食生活の改善や運動習慣の定着等による一次予防に重点を置いた対策を推進するとともに、生活習慣病の発症予防とがん、循環器疾患、糖尿病及び COPD（慢性閉塞性肺疾患）などの NCDs（非感染性疾患）の合併症の発症や症状の進展などの重症化の予防に重点を置いた対策を推進すべきであると提言している。「薬理学特論Ⅱ」では、生活習慣病や NCD 疾患における薬物治療の概略とそれに必要な医薬品の作用機序および薬理作用、副作用について概説する。また、薬理学分野の英文論文を抄読し、論文内容の把握と理解力を身に付ける。		
授業の到達目標	1) 生活習慣病や NCDs 疾患における薬物治療の理解とそれに必要な医薬品の薬理作用および副作用に関する知識を習得する。 2) 薬理学分野の英語論文を把握および理解し、まとめる能力を身につける。		
授 業 計 画			
1.	生活習慣病と NCDs について		
2.	循環器系に作用する薬Ⅰ：高血圧症と生活習慣の修正、高血圧と合併症など		
3.	循環器系に作用する薬Ⅱ：虚血性心疾患に対する治療薬など		
4.	循環器系に作用する薬Ⅲ：高脂血症と生活習慣の修正など		
5.	文献抄読Ⅰ		
6.	炎症に関する薬Ⅰ：痛風および高尿酸血症など		
7.	代謝・内分泌に作用する薬Ⅱ：骨粗鬆症とその治療薬など		
8.	代謝・内分泌に作用する薬Ⅱ：骨粗鬆症とその治療薬など		
9.	呼吸器・消化器系に作用する薬：COPD、気管支喘息および胃潰瘍治療薬など		
10.	文献抄読Ⅱ		
11.	中枢神経作用薬Ⅰ：パーキンソン病治療薬、アルツハイマー病など		
12.	中枢神経作用薬Ⅱ：抗精神病薬、抗不安薬、抗うつ・抗躁病薬など		
13.	腫瘍の化学療法薬について		
14.	文献抄読Ⅲ		
15.	まとめ		
成績評価の方法〔評価項目と割合〕			
課題レポート	抄読会英語論文レポート①	抄読会英語論文レポート②	抄読会英語論文レポート③
70%	10%	10%	10%
授業外で行うべき学習（準備学習・事後学習等）			
1) 循環器系及炎症に関する薬物のレポートを提出してもらいます。 2) 次の授業までに行うべき予習・復習について指示します。			
使用テキスト			
書籍名	著者	出版社	
・講義毎に資料を配布する。			
参考書又は参考資料等			
○「第 12 版 Goodman&Gilman 薬理書（上下）」Laurence Brunton 編（McGraw Hill 社） ○「分子神経薬理」（西村書店）○「New 薬理学」田中千賀子、加藤隆一（南山堂）・講義毎に資料を配布する。			
そ の 他（受講生への要望等）／課題等に対するフィードバックについて			
※成績評価については、循環器系薬物と炎症に関する薬物のレポートおよび骨粗鬆症、COPD、中枢神経系および腫瘍の各治療薬に関するレポート（70%）、文献抄読レポート（30%）各レポートの合計で評価する。			
担当教員の連絡先等			
担当教員 E-mail	その他		
yanagin@knwu.ac.jp			



授 業 科 目 名	解剖生理学特論 I		
担 当 者 名	松元 光春		
科 目 コ ー ド	1900015	授 業 形 態	講義
学 年	1	開 講 期	前期
単 位 数	2	履 修 方 法	選択
授業の概要と方法	生物は自身が生息する環境に適応するために進化してきた。「生物の延長としての環境」, 「環境の延長としての生物」という観点に立って, ヒト以外の動物の体の構造を理解することは体の仕組みと働きを知る上で重要である。本特論では, 様々な動物の体の構造を人体のものと比較解剖学的に考察し, 動物種特有の構造と機能を理解することを目的とする。特に骨格・筋系と運動能力の違い, 食性による消化器系の違いを理解する。		
授業の到達目標	1) 人体とウマ, ウシ, ブタ, イヌの骨格・筋系の構造と運動能力の違いを説明できる。 2) 陸の動物と空の動物(トリ)の骨格・筋系の構造と運動能力の違いを説明できる。 3) 肉食性, 草食性, 雑食性動物の消化器系の違いを説明できる。		
授 業 計 画	※講義の内容は変更になる場合があります。		
1.	ガイダンス		
2.	人体の骨格・筋系		
3.	ウマの骨格・筋系		
4.	ウシの骨格・筋系		
5.	ブタの骨格・筋系		
6.	イヌの骨格・筋系		
7.	ニワトリの骨格・筋系		
8.	まとめ(骨格・筋系の動物の違い)		
9.	人体の消化器系		
10.	草食性動物の消化器系		
11.	肉食性動物の消化器系		
12.	雑食性動物の消化器系		
13.	海性動物の消化器系		
14.	ニワトリの消化器系		
15.	まとめ(消化器系の動物の違い)		
成績評価の方法〔評価項目と割合〕			
レポート	プレゼンテーション		
50%	50%		
授業外で行うべき学習(準備学習・事後学習等)			
適宜課題を与えるので, それについてプレゼンテーションを行うこと。発表が中心になります。			
使用テキスト			
書籍名	著者	出版社	
※その他欄参照			
参考書又は参考資料等			
・講義の進度に応じて, 適宜紹介していきます。			
そ の 他 (受講生への要望等) / 課題等に対するフィードバックについて			
関連図書やインターネット等で各自積極的に調べることが望まれる。発表が中心になります。			
担当教員の連絡先等			
担当教員 E-mail	その他		

授 業 科 目 名	解剖生理学特論Ⅱ		
担 当 者 名	松元 光春		
科 目 コ ー ド	1900016	授 業 形 態	講義
学 年	1	開 講 期	後期
単 位 数	2	履 修 方 法	選択
授業の概要と方法	卵子と精子の接合により受精卵が発生し、分割し、胚盤胞となって、子宮に着床し、胎子発生が始まる。この一連の発生過程の何処かで、人為的な遺伝子操作を加え、個体レベルで作出する操作を発生工学と呼ぶ。本特論では、発生工学に関する基礎知識を理解し、その歴史、その手法、その成果、その問題点を把握する。特に最近の話題をピックアップし、最新の研究を扱った英語論文を理解する。		
授業の到達目標	1) 初期発生、胎子発生を説明できる。 2) 発生工学的手法を説明できる。さらにその成果や問題点を説明できる。 3) 発生工学を駆使した最新の科学論文を説明できる。		
授 業 計 画	※講義の内容は変更になる場合があります。		
1.	ガイダンス		
2.	初期発生（1）		
3.	初期発生（2）		
4.	胎子発生（1）		
5.	胎子発生（2）		
6.	キメラ作成（1）		
7.	キメラ作成（2）		
8.	核操作		
9.	外来遺伝子導入・単為発生		
10.	最新の発生工学の論文（1）		
11.	最新の発生工学の論文（2）		
12.	最新の発生工学の論文（3）		
13.	最新の発生工学の論文（4）		
14.	最新の発生工学の論文（5）		
15.	まとめ		
成績評価の方法〔評価項目と割合〕			
レポート	プレゼンテーション		
50%	50%		
授業外で行うべき学習（準備学習・事後学習等）			
適宜課題を与えるので、それについてプレゼンテーションを行うこと。発表が中心になります。			
使用テキスト			
書籍名	著者	出版社	
※その他欄参照			
参考書又は参考資料等			
そ の 他（受講生への要望等）／課題等に対するフィードバックについて			
関連図書やインターネット等で各自積極的に調べることが望まれる。発表が中心になります。			
担当教員の連絡先等			
担当教員 E-mail	その他		

授 業 科 目 名	リハビリテーション学特論 I		
担 当 者 名	橋元 隆 ・ 大丸 幸		
科 目 コ ー ド	1900025	授 業 形 態	講義
学 年	1	開 講 期	前期
単 位 数	2	履 修 方 法	選択
授業の概要と方法	<p>大丸（7回）：医療リハビリテーションの基礎に基づいて、地域で暮らす高齢・障害児者の生活支援技術を学修する。</p> <p>橋元（8回）：リハビリテーションの概念は大きく変化し、現在では単に障害に対する治療・訓練というものではなく、高度に進歩した臓器別専門治療を提供し、住み慣れたところで安心して自分らしく暮らせるように具現化するところにある。心身機能の改善のみではなく最終的には「生活支援」という言葉をキーワードとして、地域で人間らしく生きることについて考える。</p>		
授業の到達目標	<p>大丸（7回）：病気や障害があっても自分らしく暮らすリハビリテーション支援の実際について、事例演習を討論しながら学修する。</p> <p>橋元（8回）：健康づくりから疾病予防、さらには高度急性期から地域生活に至るまでの過程において、多職種との質の高い連携を構築し、最終的には地域づくりに貢献できる。</p>		
授 業 計 画 ※講義内容は変更になる場合があります。			
1.	「障害診断」と「リハビリテーション評価」の視点		(大丸)
2.	「問題患者とは何か」の事例演習		(大丸)
3.	「医療から地域移行」を支援するリハビリテーション		(大丸)
4.	「地域包括支援センター」での対応事例演習		(大丸)
5.	「難病家族の心理的な問題」の事例演習		(大丸)
6.	「リハビリテーションプロセスにおける家族心理教育」の事例演習		(大丸)
7.	「精神障害者の危機介入」に必要な医療福祉連携の事例演習		(大丸)
8.	医療・介護制度について		(橋元)
9.	高度急性期・急性期リハビリテーション		(橋元)
10.	回復期リハビリテーション		(橋元)
11.	維持期・生活期リハビリテーション		(橋元)
12.	ヘルスプロモーション・介護予防		(橋元)
13.	在宅生活を支えるツール：在宅医療・在宅看護・在宅リハ・在宅介護		(橋元)
14.	食と運動、健康生活の番人		(橋元)
15.	地域づくりにおける制度・人・組織の課題について		(橋元)
成績評価の方法〔評価項目と割合〕			
※その他欄参照			
授業外で行うべき学習（準備学習・事後学習等）			
大丸：準備学修：事前配布資料を読む。事後学修：事例検討結果のワークシートの提出。 橋元：日々の出来事について様々なメディアを通じて情報の収集を図って欲しい。			
使用テキスト			
書籍名	著者	出版社	
・随時資料を配布する。			
参考書又は参考資料等			
○蜂須賀研二編集：「服部リハビリテーション技術全書 第3版」（医学書院 2014） ○乾吉祐：「医療心理学実践の手引き」（金剛出版 2007）			

その他の (受講生への要望等)	
※成績評価については、 大丸：事例演習と発表 (50%)、事例検討結果のワークシート (50%) 橋元：授業での質疑 (50%)、課題 (レポートなど) への取り組み (50%) として評価する。 大丸：事例演習が中心となりますので、事前事後の学修を主体的に行うこと。 橋元：各テーマに基づいたディスカッションができることを期待します。	
担当教員の連絡先等	
担当教員 E-mail	その他
hashimoto@knwu.ac.jp (橋元) ohmaru@knwu.ac.jp (大丸)	

授 業 科 目 名	リハビリテーション学特論Ⅱ		
担 当 者 名	大峯 三郎		
科 目 コ ー ド	1900052	授 業 形 態	講義
学 年	1	開 講 期	後期
単 位 数	2	履 修 方 法	選択
授業の概要と方法	リハビリテーションの対象となる障害者の多くは高齢者であり、その多くは何らかの栄養障害を呈している。リハ実施に際してこの点を考慮する必要性が指摘されている。特に高齢者を対象とする場合の運動療法に際しては疾患や障害特性のみではなく、加齢に伴う筋肉量の減少であるサルコペニアの存在、低栄養やホルモン分泌低下等に留意して介入を図る必要がある。この科目では疾患固有の栄養障害を知り、栄養障害が運動に及ぼす影響について学習する。		
授業の到達目標	1) 障害と栄養障害との関連性を理解できる。 2) 高齢者の栄養障害に対する運動負荷の影響を理解できる。 3) 高齢者の体力と栄養状態との関連性について理解できる。		
授 業 計 画			
1.	高齢者・障害者の栄養状態（総論）		
2.	高齢者・障害者の栄養スクリーニングとアセスメント		
3.	高齢者・障害者のサルコペニア（総論）		
4.	高齢者・障害者のサルコペニアと運動療法		
5.	高齢者・障害者の身体特性		
6.	高齢者・障害者の運動特性		
7.	栄養管理（栄養障害と身体運動）		
8.	栄養管理（疾患と栄養障害）		
9.	文献抄読（高齢者・障害者の体力に関連する和文）		
10.	文献抄読（高齢者・障害者の栄養に関連する和文）		
11.	文献抄読（高齢者・障害者の運動特性と身体特性に関連する和文）		
12.	文献抄読（高齢者・障害者の体力に関連する英文）		
13.	文献抄読（高齢者・障害者の栄養に関連する英文）		
14.	文献抄読（高齢者・障害者の運動特性と身体特性に関連する英文）		
15.	まとめ		
成績評価の方法〔評価項目と割合〕			
授業への取組み姿勢	論文抄読発表内容		
50%	50%		
授業外で行うべき学習（準備学習・事後学習等）			
1) 授業は資料に基づく解説と受講者との討論を中心に実施。 2) 文献については抄読形式で行う。 3) 栄養障害や高齢者・障害者の運動療法に関する参考文献を各自で検索する。			
使 用 テ キ ス ト			
書籍名	著者	出版社	
・適宜資料を配布する。			
参 考 書 又 は 参 考 資 料 等			
特になし			
そ の 他（受講生への要望等）／課題等に対するフィードバックについて			
・履修者は英語文献の抄読に備えて早めに翻訳を行い準備に専念すること。 課題レポートがある場合にはフィードバックを実施する。			
担当教員の連絡先等			
担当教員 E-mail	その他		
ohmine@knwu.ac.jp	オフィスアワーの利用を推奨する。火曜日 16:20～17:00、木曜日 12:10～13:10		

授 業 科 目 名	健康運動機能特論 I		
担 当 者 名	石橋 敏郎 ・ 廣滋 恵一		
科 目 コ ー ド	1900028	授 業 形 態	講義
学 年	1	開 講 期	前期
単 位 数	2	履 修 方 法	選択
授業の概要と方法	エビデンスに基づくリハビリテーション医療は、健康寿命の延伸や生活習慣病の予防にも広がりを見せ、効果的な指導法の追究が重要となっている。健康には食生活を基盤とする栄養面と身体活動を基盤とする行動体力の構築が密接に関連している。そこで、身体活動の正確な評価方法と対象者の体力に応じた実践的なアプローチの考案を目指す。健康を維持するための運動機能を正確に測定する機器の取り扱い方法を修得するとともに、運動前後における機能的変化のデータを蓄積・分析する手法を学ぶ。		
授業の到達目標	1) 健康と関連性の高い栄養と運動との関連性を理解できる 2) 運動前後の種々の身体反応を客観的に把握することができる		
授 業 計 画			
1.	運動前後における身体機能変化を把握する意義と方法について		(石橋)
2.	機能解剖と生体機能との関連について		(石橋)
3.	運動学的分析方法の実践的取り組みについて		(石橋)
4.	運動力学的分析方法の実践的取り組みについて		(石橋)
5.	栄養状態と運動との関連性に関する研究内容について		(石橋)
6.	生体力学的分析の実践的取り組みについて		(石橋)
7.	身体機能と活動状況との関連性の分析について		(石橋)
8.	研究テーマに関する情報収集の進め方について		(石橋)
9.	研究テーマに関する情報収集：運動機能の維持と低下（老化）のとらえ方		(廣滋)
10.	研究テーマに関する情報収集：形態学的な運動機能分析		(廣滋)
11.	研究テーマに関する情報収集：運動学的な運動機能分析		(廣滋)
12.	研究テーマに関する情報収集：循環機能・呼吸機能分析		(廣滋)
13.	研究テーマに関する情報収集：神経・感覚機能分析		(廣滋)
14.	研究テーマに関する情報収集：骨格筋からの情報で運動機能をとらえる		(廣滋)
15.	研究テーマに関する情報収集：感覚器からの情報で運動機能をとらえる		(廣滋)
成績評価の方法〔評価項目と割合〕			
※その他欄参照			
授業外で行うべき学習（準備学習・事後学習等）			
・ 研究テーマに関する課題の整理と先行研究・調査の確認及び最新情報の入手 ・ 文献・ジャーナル等の情報収集と抄読			
使用テキスト			
書籍名	著者	出版社	
・ 随時資料を配布する。			
参考書又は参考資料等			
・ 必要な資料などは随時配布する。			
そ の 他（受講生への要望等）／課題等に対するフィードバックについて			
※成績評価については、授業及び課題等への参加姿勢にて総合的に評価する			
担当教員の連絡先等			
担当教員 E-mail	その他		
t-ishiba@knwu.ac.jp	(石橋)		
hiroshige@knwu.ac.jp	(廣滋)		

授 業 科 目 名	健康運動機能特論Ⅱ		
担 当 者 名	石橋 敏郎・廣滋 恵一		
科 目 コ ー ド	1900053	授 業 形 態	講義
学 年	1	開 講 期	後期
単 位 数	2	履 修 方 法	選択
授業の概要と方法	疾病及び障害の影響により身体的・精神的・社会的に低下している状態を的確に把握したうえで、その状態を効果的に改善する目的で実施される運動プログラムの効果を検証する手法を学ぶ。その効果判定に使用する機器の意義と使用方法を学びつつ、研究デザインの構築において研究目的の明確化、サンプルサイズや使用機器の選定、データ整理と統計学的分析など、研究の一連の流れを演習形式にて進める。また、後半では運動機能を評価するその他の分析ツールを用いて研究への応用性を検討する。		
授業の到達目標	1) 健康状態を維持・改善する目的で実施される運動プログラムの目的と意義を説明できる。 2) 運動プログラムの効果検証のために必要な研究デザイン、データ収集と分析といった研究の一連の流れについて先行研究を参考に演習を行いながら理解を深める。 3) 多様な運動機能評価ツールを用いて研究への応用を検討する。		
授 業 計 画			
1.	身体機能の効率的分析方法について		(石橋)
2.	運動学的分析と運動力学的分析の違いについて		(石橋)
3.	運動学的分析への具体的な取り組みについて		(石橋)
4.	運動力学的分析への具体的な取り組みについて		(石橋)
5.	研究テーマに沿った測定方法と使用機器の選定		(石橋)
6.	研究テーマに沿った研究デザインの考案について		(石橋)
7.	研究テーマに沿ったデータ分析と医療統計の活用		(石橋)
8.	研究テーマに沿った研究計画書の考案		(石橋)
9.	表面筋電図を用いた筋活動データ収集に関する基本的処置		(廣滋)
10.	表面筋電図を用いた運動時の筋活動データ収集		(廣滋)
11.	筋活動データ分析方法		(廣滋)
12.	BIA 法での体組成分析に関する基本的処置		(廣滋)
13.	BIA 法での体組成分析方法		(廣滋)
14.	BIA 法での体組成分析の応用		(廣滋)
15.	まとめ		(廣滋)
成績評価の方法〔評価項目と割合〕			
※その他欄参照			
授業外で行うべき学習（準備学習・事後学習等）			
・研究テーマに関する情報収集と研究テーマに即したデータ収集と分析			
使用テキスト			
書籍名	著者	出版社	
使用しない			
参考書又は参考資料等			
・必要な資料などは随時配布する。			
そ の 他（受講生への要望等）／課題等に対するフィードバックについて			
※成績評価については、演習及び課題等への参加姿勢にて総合的に評価する			
担当教員の連絡先等			
担当教員 E-mail	その他		
t-ishiba@knwu.ac.jp	(石橋)		
hiroshige@knwu.ac.jp	(廣滋)		

授 業 科 目 名	神経障害支援特論 I		
担 当 者 名	高橋 精一郎		
科 目 コ ー ド	1900039	授 業 形 態	講義
学 年	1	開 講 期	後期
単 位 数	2	履 修 方 法	選択
授業の概要と方法	リハビリテーションの対象には神経・筋疾患や骨・関節疾患、呼吸・循環・代謝障害の内部疾患などがあるが、それらの中には自律神経障害を有しているケースも見られる。自律神経は血圧や呼吸の調節を行うことから、神経活動を解析することで運動負荷量の判断や治療効果の判定指標として利用できる。本授業では自律神経活動の機序を理解するとともに、心電図から自律神経活動を分析し、その意味を解釈する。		
授業の到達目標	1) 自律神経活動の機序を理解したうえで、心電図の測定から自律神経活動を分析し、その結果の解釈ができる。 2) 臨床研究における測定指標としての意義を理解し、活用できる。		
授 業 計 画			
1.	自律神経系の構造と機能		
2.	自律神経活動の機序と身体反応		
3.	自律神経障害の症状		
4.	運動と自律神経活動の関連		
5.	自律神経活動の測定方法		
6.	自律神経の測定と分析		
7.	運動時の自律神経活動の変化		
8.	臥位における自律神経活動		
9.	坐位における自律神経活動		
10.	立位における自律神経活動		
11.	運動時の自律神経活動の変化（椅子からの立ち上がり）		
12.	運動時の自律神経活動の変化（スクワット）		
13.	運動時の自律神経活動の変化（重りによる負荷時）		
14.	自律神経活動分析の臨床応用		
15.	まとめ		
成績評価の方法〔評価項目と割合〕			
討論への参加姿勢			
100%			
授業外で行うべき学習（準備学習・事後学習等）			
自律神経活動に関する生理学等の知識について、学部時代に勉強の復習を行うとともに、新た知識については事後の学修にて整理し、理解すること。			
使用テキスト			
書籍名	著者	出版社	
使用しない			
参考書又は参考資料等			
随時資料を配布する。			
そ の 他（受講生への要望等）／課題等に対するフィードバックについて			
各種刺激に対する自律神経活動について、生理学的分析を含めてディスカッションが進められるよう準備してほしい。			
担当教員の連絡先等			
担当教員 E-mail	その他		
s-takahashi@knwu.ac.jp			



授 業 科 目 名	神経障害支援特論Ⅱ		
担 当 者 名	渕 雅子		
科 目 コ ー ド	1900054	授 業 形 態	講義
学 年	2	開 講 期	前期
単 位 数	2	履 修 方 法	選択
授業の概要と方法	リハビリテーションが対象とする患者は、末梢神経障害、中枢神経障害、代謝性疾患、長期臥床による廃用症候群や呼吸器障害など多岐に渡っている。これらの疾患や障害が、自律神経の反応にどのように影響するか、あるいはどのような自律神経障害に関連しているかを考える。		
授業の到達目標	各種疾患と自律神経障害との関連から、リハビリテーションプログラム立案時および施行時の留意点を理解する。		
授 業 計 画			
1.	全身性自律神経障害と局所性自律神経障害		
2.	自律神経障害を来す主な疾患		
3.	①脳血管障害と自律神経障害		
4.	②リハビリテーション施行時の留意点		
5.	①パーキンソン病と自律神経障害		
6.	②リハビリテーション施行時の留意点		
7.	①ギランバレー症候群と自律神経障害		
8.	②リハビリテーション施行時の留意点		
9.	①多発性硬化症と自律神経障害		
10.	②リハビリテーション施行時の留意点		
11.	①脊髄損傷と自律神経障害		
12.	②リハビリテーション施行時の留意点		
13.	①糖尿病と自律神経障害		
14.	②リハビリテーション施行時の留意点		
15.	まとめ		
成績評価の方法〔評価項目と割合〕			
※その他欄参照			
授業外で行うべき学習（準備学習・事後学習等）			
・自律神経活動そのものに対する理解を深めるために、これまでの基礎知識を整理する。学習後は、復習を習慣付けること。			
使用テキスト			
書籍名	著者	出版社	
・資料を配布予定。			
参考書又は参考資料等			
特になし			
そ の 他（受講生への要望等）／課題等に対するフィードバックについて			
※成績評価については、積極性や探究心、授業中の姿勢により総合的に評価する。 ・各種疾患と自律神経の関連を深く理解して下さい。			
担当教員の連絡先等			
担当教員 E-mail	その他		
fuchi@knwu.ac.jp			

授 業 科 目 名	地域活動支援特論 I		
担 当 者 名	大丸 幸・佐野 幹剛		
科 目 コ ー ド	1900033	授 業 形 態	講義
学 年	1	開 講 期	後期
単 位 数	2	履 修 方 法	選択
授業の概要と方法	地域住民の健康増進や高齢・障害児者が期待される最良の心身の状況を獲得し、年齢や障害の程度に応じ、その地域に住む方々と協働する支援技術について討議・探求する。前半は高齢者の介護予防や地域在住障害者の医療保健福祉の視点からの継続支援と統合機能について論考する。後半は母子保健事業や特別支援教育における支援技術について討議・論考する。		
授業の到達目標	1) 高齢障害者のニーズ把握と支援技術および生活の場の診断と課題分析ができるようになる。 2) 地域で生活する課題のある子どもの評価選択・実施・解釈および支援技術の分析ができるようになる。 3) 家庭および保育所、幼稚園、学校など生活の場における課題分析ができるようになる。		
授 業 計 画			
1.	地域包括ケアシステムの実際と課題：高齢者福祉と介護保険制度導入によるリハ専門職への期待		(大丸)
2.	個別地域ケア会議の事例演習：うつ病高齢者・運動器疾患・認知高齢者のプレゼンとミニ討議		(大丸)
3.	個別地域ケア会議の事例演習：脳卒中・神経筋疾患・下腿切断のプレゼンとミニ討議		(大丸)
4.	障害者総合支援法と身体障害者福祉法：補装具を介した在宅生活支援事例のミニ討議		(大丸)
5.	障害者総合支援法と精神保健福祉法：治療中断・未治療者の訪問事例のミニ討議		(大丸)
6.	難病対策と ALS の呼吸困難と重度意思伝達装置（ビデオ）：PT/OT の役割ミニ討議		(大丸)
7.	高次脳機能障害者の行政的診断とリハビリテーション：受傷から退院後生活までビデオのミニ討議		(大丸)
8.	課題レポートの発表：医療・生活の両面からの継続支援と統合機能についてのグループ討議と提出		(大丸)
9.	母子保健事業における乳幼児発達相談の実際と課題：個別支援と家族支援；講義・討議		(佐野)
10.	母子保健事業における乳幼児発達相談の実際と課題：地域支援；講義・討議		(佐野)
11.	特別支援教育の現状と課題：発達障害の障害特性；講義		(佐野)
12.	特別支援教育の現状と課題：発達障害に対する評価の選択・実施・解釈；講義・討議		(佐野)
13.	特別支援教育の現状と課題：障害特性に応じた合理的配慮；講義・討議		(佐野)
14.	事例検討：自閉スペクトラム症を持つ子どもの課題分析と包括的支援；グループ討議		(佐野)
15.	事例検討：注意欠如多動性障害を持つ子どもの課題分析と包括的支援；グループ討議		(佐野)
成績評価の方法〔評価項目と割合〕			
大丸：指定課題レポートの提出		大丸：事例演習の討議	
佐野：課題レポートの提出		佐野：事前学習内容の提出	
75%		25%	
授業外で行うべき学習（準備学習・事後学習等）			
大丸：事例演習の事前学修と発表準備、事後学修は指定課題レポートの作成 佐野：9～10回では「母子保健法」「子ども子育て支援法」、11～13回では「児童福祉法」「学校教育法」「障害者の権利に関する条約」について準備学習すること。事後学習として課題レポートを作成すること。			
使用テキスト			
書籍名		著者	出版社
資料配布します。（大丸、佐野）			
参考書又は参考資料等			
田中康之・清水順市編集：地域包括ケアにおける PT/OT の役割，文光堂,2016			

その他の (受講生への要望等) / 課題等に対するフィードバックについて	
<p>医療に対するニーズが大きく変化し、医療保健福祉サービスを総合的に供給するシステムを理解することが求められていますので、積極的な参加を期待します。前半は講義とショート事例を紹介してミニグループ討議と発表を行います。</p> <p>後半の討議では受講生の臨床経験を踏まえた活発な議論を期待しています。課題レポートについてはフィードバック資料として返却します。今後の研究や臨床にご活用ください。</p>	
担当教員の連絡先等	
担当教員 E-mail	その他
sano@knwu.ac.jp	大丸：授業前後 10 分間は研究室で質問対応可。

授 業 科 目 名	地域活動支援特論Ⅱ		
担 当 者 名	渕 雅子・大丸 幸		
科 目 コ ー ド	1900055	授 業 形 態	講義
学 年	2	開 講 期	前期
単 位 数	2	履 修 方 法	選択
授業の概要と方法	前半は、高次脳機能障害者のリハビリテーションや環境整備のあり方について、現状の実践とエビデンスの確立状況を検討・論考する。後半は、精神障害や高次脳機能障害者および遺死家族等の家族支援についての事例演習から、リハビリテーション家族学の課題を討論・論考する。		
授業の到達目標	1) 地域生活支援の概要を理解できる。 2) 次脳機能障害者の地域生活の課題と支援を、実際症例を通して論考できるようになる。 3) リハビリ対象者の事例演習から家族支援技術を発表・討議できるようになる。 4) リハビリテーション家族学の課題を討論・論考できるようになる。		
授 業 計 画			
1.	地域活動支援概論 1：地域とは 地域活動支援の歴史		(渕)
2.	地域活動支援概論 2：医療から地域へ、社会保障制度の変遷		(渕)
3.	地域活動支援の現状		(渕)
4.	地域ケアシステムにおけるセラピストの役割		(渕)
5.	高次脳機能障害者の地域生活支援事例演習 1：地域生活での課題は何か？		(渕)
6.	高次脳機能障害者の地域生活支援事例演習 2：生活障害の理解と生活・介護・家族支援と環境調整支援		(渕)
7.	高次脳機能障害者の地域生活支援事例演習 3：就労支援		(渕)
8.	法制度や関連福祉サービスと地域リハビリテーションの課題（家族機能評価と家族支援学）の概説		(大丸)
9.	家族学の歴史と理論（分裂病の家族研究）：家族機能評価の事例演習（統合失調症・ALS）と討議		(大丸)
10.	家族の心理教育的アプローチ：家族支援の事例演習（精神科デイケアの事例）と討議		(大丸)
11.	リハビリテーションプロセスにおける家族心理教育：高次脳機能障害者の事例（1）（2）演習と討議		(大丸)
12.	リハビリテーションプロセスにおける家族心理教育：高次脳機能障害者の事例（3）（4）演習と討議		(大丸)
13.	救急外来事例：入院から回復の兆しと自殺の事例（P 341～348、363～388）演習と討議		(大丸)
14.	死と生にどう向き合うか：遺死家族・職場・支援者を支える事例演習と討議		(大丸)
15.	事例演習からリハビリテーション家族学の課題発表と討議・論考（論考レポート提出）		(大丸)
成績評価の方法〔評価項目と割合〕			
大丸：課題発表と論考レポートの提出		大丸：事例演習発表と討議	
渕：課題レポートの提出		渕：事例演習発表	
75%		25%	
授業外で行うべき学習（準備学習・事後学習等）			
大丸：事例演習の事前学修と発表準備、事後学修は指定課題レポートの作成。 渕：地域活動支援について文献検索と課題の論考。			
使用テキスト			
書籍名	著者	出版社	
大丸・渕：資料配布			
参考書又は参考資料等			
野村進：救急精神病棟,講談社,2010 大丸幸他：リハビリテーションプロセスにおける家族心理教育,九州栄養福祉大学研究紀要,2013			

その他の (受講生への要望等) / 課題等に対するフィードバックについて	
前半は、課題については授業中にディスカッションと合わせフィードバックする。また症例の持ち寄りをお願いしたい。 後半は、リハビリテーション家族支援学の事例演習から課題の論考をしますが、各自の事例持ち寄りも歓迎します。	
担当教員の連絡先等	
担当教員 E-mail	その他
ohmaru@knwu.ac.jp (大丸) fuchi@knwu.ac.jp (淵)	大丸：授業前後 10 分間は研究室で質問対応可。

授 業 科 目 名	環境健康生活特論 I		
担 当 者 名	奥村 チカ子		
科 目 コ ー ド	1900035	授 業 形 態	講義
学 年	1	開 講 期	後期
単 位 数	2	履 修 方 法	選択
授業の概要と方法	機能障害が生活障害としてどのように現れるかは帰属する文化や社会システムにより大きく異なる。多様な生活環境のなかで健康生活を獲得・維持していくための支援の在り方を理解する。学生との協議の中からテーマの絞り込みを行って検討し理解を深めて、具体的な解決策を企画する力を高める。		
授業の到達目標	自身の地域社会の文化を理解することからその多様性を知り、障がい者の生活権・交通権等に代表されるノーマライゼーションへの理解を深める。		
授 業 計 画			
1.	総論		
2.	生活文化の地域特性		
3.	多様な海外の生活文化		
4.	地域社会の特性による機能障害と生活障害の関係		
5.	テーマ選択のための検討		
6.	心身機能面の課題背景分析		
7.	心身機能面の課題の理解		
8.	心身機能面の課題解決の企画		
9.	自由と介護分野の課題背景の分析		
10.	自由と介護 介護者の状況理解		
11.	自由と介護 拘束の問題分析		
12.	自由と介護 拘束の問題解決への企画		
13.	ADA の課題		
14.	バリアフリーと UD		
15.	生活と道具・環境と社会システム理解の総括		
成績評価の方法〔評価項目と割合〕			
レポート	授業への取り組み姿勢		
70%	30%		
授業外で行うべき学習（準備学習・事後学習等）			
・討議に備えて事前の検討事後の学習を必要とする。			
使用テキスト			
書籍名	著者	出版社	
・適宜資料配付する。			
参考書又は参考資料等			
特になし			
そ の 他（受講生への要望等）／課題等に対するフィードバックについて			
※成績評価については、議論に主体的に参加して、問題点の指摘と自ら提案する姿勢を評価する。			
・課題に対して自ら調査、検討して提案して積極的に議論に主体的に参加することを希望する。			
・提出レポートはこちらから指定する用紙を使用する場合以外は A4 に限る。			
担当教員の連絡先等			
担当教員 E-mail	その他		
okumura@knwu.ac.jp			

授 業 科 目 名	環境健康生活特論Ⅱ		
担 当 者 名	奥村 チカ子		
科 目 コ ー ド	1900056	授 業 形 態	講義
学 年	2	開 講 期	前期
単 位 数	2	履 修 方 法	選択
授業の概要と方法	障害者や高齢者の生活環境について、在宅生活を支える様々な社会サービスを理解するとともに、住環境整備に関する法的制度(介護保険制度)、障害者や高齢者の身体的特性の理解、疾病別・障害別の住環境整備の在り方を学ぶ。住環境整備の基本技術として、住宅改修や福祉用具の活用などを学ぶ。演習として、自作可能な介護用品の作製を行う。また、海外の福祉事情と対比して我が国の福祉について検討する。		
授業の到達目標	障害者や高齢者の在宅生活の実情を理解し、住環境整備の必要性を学ぶ。福祉用具の製作を通し身体機能に応じた福祉用具の在り方を考える。また、我が国と外国との福祉施策を対比する中より、今後の高齢社会における取り組みを考える。		
授 業 計 画			
1.	オリエンテーション		
2.	福祉用具の紹介		
3.	介護用品の製作①		
4.	介護用品の製作②		
5.	介護用品の製作③		
6.	介護用品の製作④		
7.	プレゼンテーション		
8.	住宅の見取り図作成①		
9.	住宅の見取り図作成②		
10.	住宅の見取り図作成③		
11.	住宅の見取り図作成④		
12.	プレゼンテーション		
13.	海外の福祉事情 (欧米)		
14.	海外の福祉事情 (アジア)		
15.	プレゼンテーション		
成績評価の方法〔評価項目と割合〕			
※その他欄参照			
授業外で行うべき学習 (準備学習・事後学習等)			
・プレゼンテーションに対しては入念に準備をして頂きたい。			
使用テキスト			
書籍名	著者	出版社	
・適宜資料配付する。			
参考書又は参考資料等			
特になし			
そ の 他 (受講生への要望等) / 課題等に対するフィードバックについて			
※成績評価については、レポート提出およびプレゼンテーションの内容を総合して評価。 ・演習と講義を中心に進める。 ・福祉用具の製作を通して、障害者の生活を理解する。			
担当教員の連絡先等			
担当教員 E-mail	その他		
okumura@knwu.ac.jp			

授 業 科 目 名	小児リハビリテーション支援特論 I		
担 当 者 名	佐野 幹剛 ・ 奥田 憲一		
科 目 コ ー ド	1900041	授 業 形 態	講義
学 年	1	開 講 期	前期
単 位 数	2	履 修 方 法	選択
授業の概要と方法	主に脳性麻痺や重症心身障害をはじめとする、神経系疾患に伴う姿勢や運動の障害を持つ子ども達に対する介入法の効果判定や計測学的・生理学的評価について探求する。(奥田) 社会モデルの中で活用できる関連法規に触れながら、社会的環境の変化に応じた個別支援や家族支援、関連職種との連携など地域での包括的支援について概観する。(佐野)		
授業の到達目標	介入法の効果判定に必要な研究デザインの知識を修得するため、文献研究に基づいて、各論文の研究デザインの解説を演習形式で行っていく。また計測学的・生理学的評価についても文献研究と演習形式で手技の確立に努める。(奥田) 発達障害を持つ子どもの障害特性に応じた個別支援及び家族支援を理解し支援計画を立案することができる。また、関連職種との連携を含む地域での包括的支援計画を立案することができる。(佐野)		
授 業 計 画			
1.	脳性麻痺や重症心身障害に対するリハビリテーション支援の概念	(奥田) ; 講義	
2.	重症心身障害児・者の臨床像とリハビリテーション	(奥田) ; 講義	
3.	重症心身障害児・者に対する非対称変形に関する概念 (文献研究)	(奥田) ; 発表と討議	
4.	重症心身障害児・者に対する非対称変形に関する計測学的評価 (文献研究)	(奥田) ; 発表と討議	
5.	重症心身障害児・者に対するポジショニングの効果判定 (文献研究)	(奥田) ; 発表と討議	
6.	重症心身障害児・者に対する体重免荷環境における身体運動の効果判定 (文献研究)	(奥田) ; 発表と討議	
7.	脳性麻痺や重症心身障害に対するリハビリテーションの効果判定と研究デザイン (文献研究)	(奥田) ; 発表と討議	
8.	発達障害の障害特性について 自閉スペクトラム症、注意欠如多動性障害、限局性学習症	(佐野) ; 講義	
9.	自閉スペクトラム症を持つ子どもに対する個別支援・家族支援・地域支援の支援計画	(佐野) ; 講義と討議	
10.	注意欠如多動性障害を持つ子どもに対する個別支援・家族支援・地域支援の支援計画	(佐野) ; 講義と討議	
11.	限局性学習症を持つ子どもに対する個別支援・家族支援・地域支援の支援計画	(佐野) ; 講義と討議	
12.	事例検討：発達障害を持つ子どもに対する社会性スキルの包括的支援計画	(佐野) ; 討議	
13.	事例検討：発達障害を持つ子どもに対する教科学習スキルの包括支援計画	(佐野) ; 討議	
14.	事例検討：発達障害を持つ子どもに対するコミュニケーションスキルの包括支援計画	(佐野) ; 討議	
15.	まとめ (奥田)		
成績評価の方法〔評価項目と割合〕			
※その他欄参照。			
授業外で行うべき学習 (準備学習・事後学習等)			
オンライン文献データベースを活用して、授業計画を参考に実際の文献検索に慣れていくこと。			
使用テキスト			
書籍名	著者	出版社	
・ 随時資料を配布します。			
参考書又は参考資料等			
特になし			



その他の (受講生への要望等) / 課題等に対するフィードバックについて	
※成績評価については、講義及び発表と討議への参加姿勢にて総合的に評価。 ・重症心身障害に対するリハビリテーションの効果判定の表現法に興味を持って参加して欲しい。 ・発達障害に対する包括的支援、他職種連携について理解を深め臨床に活かしてほしい。	
担当教員の連絡先等	
担当教員 E-mail	その他
okuda@knwu.ac.jp (奥田) sano@knwu.ac.jp (佐野)	

授 業 科 目 名	小児リハビリテーション支援特論Ⅱ		
担 当 者 名	佐野 幹剛 ・ 奥田 憲一		
科 目 コ ー ド	1900057	授 業 形 態	講義
学 年	1	開 講 期	後期
単 位 数	2	履 修 方 法	選択
授業の概要と方法	「小児リハビリテーション支援特論Ⅰ」での学修を修士論文作成に繋げていくために、主に重症心身障害児・者に対するリハビリテーションの効果判定に関する文献抄読を通して、それらの文献の研究デザインについて考察し理解する。(奥田) 発達障害を持つ子どもと家族の課題および分析技法、効果判定に関する研究デザインについて検討・討議する。(佐野)		
授業の到達目標	修士論文テーマに関連する文献研究や修士論文の研究デザインに沿って、発表と討議による小児リハビリテーション支援の効果判定の表現法を理解する。(奥田・佐野)		
授 業 計 画			
1.	脳性麻痺や重症心身障害に対する効果判定と研究デザイン	(奥田)；講義	
2.	重症心身障害児・者の計測学的評価と研究デザイン	(奥田)；講義	
3.	重症心身障害児・者の生理学的評価と研究デザイン	(奥田)；講義	
4.	重症心身障害児・者の効果判定：シングルケーススタディ① (文献研究)	(奥田)；発表と討議	
5.	重症心身障害児・者の効果判定：シングルケーススタディ② (文献研究)	(奥田)；発表と討議	
6.	重症心身障害児・者の効果判定：比較研究① (文献研究)	(奥田)；発表と討議	
7.	重症心身障害児・者の効果判定：比較研究② (文献研究)	(奥田)；発表と討議	
8.	発達障害を持つ子どもの課題と分析技法：読み書きスキルに対する研究デザイン	(佐野)；検討・討議	
9.	発達障害を持つ子どもの課題と分析技法：操作スキルに対する研究デザイン	(佐野)；検討・討議	
10.	発達障害を持つ子どもの課題と分析技法：ADLスキルに対する研究デザイン	(佐野)；検討・討議	
11.	発達障害を持つ子どもの課題と分析技法：社会性スキルに対する研究デザイン	(佐野)；検討・討議	
12.	発達障害を持つ子どもの効果判定：量的研究	(佐野)；検討・討議	
13.	発達障害を持つ子どもの効果判定：質的研究	(佐野)；検討・討議	
14.	発達障害を持つ子どもの家族に対する課題と研究デザイン	(佐野)；検討・討議	
15.	まとめ (奥田)		
成績評価の方法〔評価項目と割合〕			
※その他欄参照。			
授業外で行うべき学習 (準備学習・事後学習等)			
オンライン文献データベースを活用した文献検索が比較的容易に行えること。			
使用テキスト			
書籍名	著者	出版社	
・随時資料を配布します。			
参考書又は参考資料等			
特になし			
そ の 他 (受講生への要望等) / 課題等に対するフィードバックについて			
※成績評価については、講義及び発表と討議への参加姿勢にて総合的に評価。 ・修士論文作成のためには十分な文献研究が必須であることを理解して参加して欲しい。			
担当教員の連絡先等			
担当教員 E-mail		その他	
okuda@knwu.ac.jp (奥田) sano@knwu.ac.jp (佐野)			

授 業 科 目 名	精神科リハビリテーション学特論 I		
担 当 者 名	大丸 幸		
科 目 コ ー ド	1900043	授 業 形 態	講義
学 年	1	開 講 期	前期
単 位 数	2	履 修 方 法	選択
授業の概要と方法	地域精神保健の視点より、急性期医療から地域生活移行・定着および再発予防までシームレスなリハビリテーションサービス（アウトリーチ）を提供するための展開方法や技術を探求する。「精神科リハビリテーション学特論 I」では、精神障害者の病気・疾患および治療・回復過程の捉え方の基本についての事例演習と討議を行う。また、北九州市保健福祉局の地域支援体制づくりの取り組み実践事例を振り返りながら、地域における多職種・他機関連携についての事例演習と討議・課題考察を行う。		
授業の到達目標	1) 医療から地域精神保健福祉までの流れと地域生活定着に必要な精神保健技術を修得する。 2) 地域支援体制づくりの実践事例から、保健医療福祉連携(IPW)ができるようになる。 3) アウトリーチ等の事例演習から、地域に働きかけるリハ専門職の課題を抽出し論考できる。		
授 業 計 画			
1.	病気・疾患の捉え方：症状精神医学・力動精神医学・包括的アプローチの基礎理論と日常生活制限 6 要因		
2.	治療・回復過程の捉え方：治療・回復期別の支援目標と精神障害者の病気・障害・健康の 3 つの側面		
3.	シームレスな治療構造：入院・デイケア・アウトリーチ・ACT・予防の回復指標や再発サインの捉え方		
4.	障害受容の力動的観点（ICIDH と ICF）：（1）脊髄損傷患者の障害受容否認事例の演習と討議		
5.	同上（2）回復過程を阻む要因と社会復帰に向けてのアプローチの課題考察		
6.	家族の障害受容の過程：（1）難病患者の家族の障害受容否認の事例演習と討議と課題考察		
7.	同上（2）チームスタッフ間の投影同一視と家族の喪失体験・家族力動の変化の課題考察		
8.	精神障害者の地域移行と北九州市の取り組み：精神科デイケアを拠点にした医療保健福祉の連携システム		
9.	精神科デイケアの有効性と課題：地域包括プログラムと統合失調症 617 事例検証の討議と課題考察		
10.	アウトリーチ推進事業の事例演習（危機介入）の討議と課題考察		
11.	アウトリーチ推進事業の事例演習（訪問看護）の討議と課題考察		
12.	精神科分野における多職種・他機関連携協働の実際（1）：事例演習と討議による課題考察		
13.	精神科分野における多職種・他機関連携協働の実際（2）：事例演習と討議による課題考察		
14.	障害総合支援法等による福祉サービスと社会復帰施設のリハビリテーション		
15.	各事例演習からの課題考察の発表とグループ討議（課題考察レポート提出）		
成績評価の方法〔評価項目と割合〕			
課題考察の発表と課題考察レポートの提出		事例演習の討議と課題考察	
75%		25%	
授業外で行うべき学習（準備学習・事後学習等）			
事例演習の事前学修と発表準備、事後学修は指定課題レポートの作成			
使用テキスト			
書籍名	著者	出版社	
資料配布します。			
参考書又は参考資料等			
築瀬誠：精神障害作業療法入門,協働医書出版社,2012			
乾吉祐：医療心理学,金剛出版,2007			
寺山久美子編集：作業療法学全書 別巻地域作業療法学,協同医書出版社,2001			
松下正明総編集：精神医療におけるチームアプローチ（臨床精神医学講座 S5）,中山書店,2000			
そ の 他（受講生への要望等）／課題等に対するフィードバックについて			
指定事例に加えて、各自固有の臨床事例討議の提供を歓迎します。			
担当教員の連絡先等			
担当教員 E-mail	その他		
授業前後 10 分間は研究室で質問対応可。			

授 業 科 目 名	精神科リハビリテーション学特論Ⅱ		
担 当 者 名	大丸 幸		
科 目 コ ー ド	1900058	授 業 形 態	講義
学 年	1	開 講 期	後期
単 位 数	2	履 修 方 法	選択
授業の概要と方法	地域精神保健の視点より、急性期医療から地域生活移行・定着および再発予防までシームレスなリハビリテーションサービス（アウトリーチ）を提供するための展開方法や技術を探求する。特論Ⅱでは、救急精神病等の事例演習の討議と課題考察により、精神科リハビリテーション技術を推敲する。また、修士論文テーマと関連する文献発表と討議により、論文推敲を深める。		
授業の到達目標	1) 急性期から地域移行までの多角的な事例演習より、 2) 地域支援体制づくりの実践事例から、保健医療福祉連携(IPW)ができるようになる。 3) アウトリーチ等の事例演習から、地域に働きかけるリハ専門職の課題を抽出し論考できる。		
授 業 計 画			
1.	「救急精神病棟」からの事例演習と課題考察のオリエンテーション：事例選択方法①～⑧他と発表要領		
2.	精神科救急入院（医療保護入院）・回診：救急処置～抑制帯の解除までの事例演習（P21～56）と課題考察①		
3.	病状悪化（逆戻り・昏迷）の薬物療法調整や通電療法：アプローチ法事例演習（P348～400）と課題考察②		
4.	外国籍者の緊急措置入院・保護室訪問：大使館を通して家族連絡する事例演習（P105～114）と課題考察③		
5.	医療と司法：心身喪失者等医療観察法事例演習（P283～308）と課題考察④		
6.	深夜勤：CPR（心肺蘇生法）の緊急対応事例演習（P87～105）と課題考察⑤		
7.	神様：統合失調症の妄想事例演習（P139～151）と課題考察⑥		
8.	生還者：ゴミの山の幻覚妄想状態の親子事例演習（P189～210）と課題考察⑦		
9.	精神病と脳：脳内の意図のセンターの機能停止が基本的な障害（P157～188）の概説演習と課題考察⑧		
10.	修士論文関連文献レビューと論文推敲議論①		
11.	" ②		
12.	" ③		
13.	" ④		
14.	" ⑤		
15.	指定課題レポートの発表とグループ討議（課題考察レポート提出）		
成績評価の方法〔評価項目と割合〕			
指定課題レポートの発表と討議	事例演習課題討議と提出		
75%	25%		
授業外で行うべき学習（準備学習・事後学習等）			
事例演習の事前学修と発表準備、事後学修は指定課題レポートの作成 修士論文テーマ関連文献の検索と論文推敲の準備			
使用テキスト			
書籍名	著者	出版社	
救急精神病棟	野村 進	講談社,2010	
参考書又は参考資料等			
埼玉県立大学編集：IPWを学ぶ（利用者中心の保健医療福祉連携）,中央法規,2016 矢谷令子他：IPラーニングシリーズ1～5,協同医書出版社,2018 松下正明総編集：精神医療におけるチームアプローチ（臨床精神医学講座 S5）,中山書店,2000			
そ の 他（受講生への要望等）／課題等に対するフィードバックについて			
指定教科書から事例を選択して課題考察する、または各自固有の臨床事例の提供による課題考察も歓迎します。			
担当教員の連絡先等			
担当教員 E-mail	その他		
	授業前後 10 分間は研究室で質問対応可。		